

---

# 学校戦争騒音部

柳川一步

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学校戦争騒音部

### 【Nコード】

N8196W

### 【作者名】

柳川一歩

### 【あらすじ】

主人公は高校一年生のエナ。

物語が始まる7年前に日本の経済が崩壊する。日本はその立て直しに失敗し、衰退の一途をたどっていった。

3年前に家族を交通事故で失い、エナは無気力で無機質な生活を送っていた。

ある日、エナの幼馴染の少女デュオは、退屈な学校生活を壊してしまおうとエナに持ちかける。

エナはデュオの願いを叶えるために、学校に対し、戦争を仕掛け



## スタートライン

《七月 十二日 AM7:45》

朝起きて顔を洗い、肩辺りまで伸びた髪についた寝癖を丁寧に直していく。

ある程度身だしなみを整えると狭いワンルームのアパートの小さな台所で朝食を作り、一緒に食事をする人間もないので一人での朝食を食べる。

朝食を終えると歯を磨き、パジャマ脱いでその140?前半しかない小さな体を普段着で包む。

それ以外は何も無い。

平凡で退屈。

それがエナの日常だった。

アパートの玄関からドアを開けて外に出ると近所のおばちゃんが立っていた。

おばちゃんはエナの方を見て、少し首をかしげると急に一人で納得した。

「そっか、今年からもう高校生だっけ。私服着ているからおばさん、ビックリしちゃった」

どうやらエナが私服であることが疑問だったらしい。

今、エナはノースリーブのシャツにカーゴパンツという格好をしている。

中学のころは制服だったので、私服を着ていたのが不思議だったのだろう。

「おはようございます」

「はい、おはよう。エナちゃんはすっかり挨拶できて偉いわね。うちの息子は高校に入ってからには私には何もしゃべらなくて。エナちゃんなら春桜女子の制服とかも似合うと思うのにねえ」

「御冗談を」

二人はそこで少し笑う。

春桜女子高校は制服が可愛いということでも人気な進学校だ。

「どお？ 高校生活は楽しい？」

平凡な会話。

「はい、とつても」

やはり、平凡な答えをした。

七年前、日本の経済は破綻してしまった。

デフレが続き、物価は下落の一途をたどり、人々の収入も目減りし、かつ、安定しなくなつて行つた。

それに伴い、税収もまともに取りることができず、国家の借金は雪だるまのように増えてゆく。

収入低下に伴つたりストラの増加。

リストラの増加より、失業者が増加。

失業者の増加に伴つての犯罪件数の増加。

そして、日本は廃退の一途をたどつてしまった。

エナの人生に大きな衝撃があつたのは去年の秋、その日はエナの通つていた中学校の文化祭だつた。

元々、エナは父母と兄の四人家族だつた。

兄と父と母、三人は赤信号を無視し、猛スピードで突っ込んできたトラックにはねられたそうだ。

犯人は逃走し、いまだに捕まつていない。

エナが病院に脚気こんだときに目に入ったのは、確かに三人だつたはずの斑点だらけになつた、ポロポロの肉塊だつた。

いとこの家がエナを引き取るといった話も出てきたがエナはそれを断つた。

人に頼りたくなかつたというのもあつた。そして何よりどこかに移り住むのがいやだつたのだ。

アルバイトありで、特待生合格すると学費全額免除の学校が近くにあつてつごうが良かったというのもある。

そのような経緯で現在のエナがある。

「おっはよー、エナ」

突然の声とともに誰かにのしかかられる感触。

「いやー、今日もエナはかわいいーな」

「ちよっ、重いよデユオ」

のしかかってくる人を押しつけ後ろを見ると、そこにはきれいな黒髪を腰まで伸ばした少女がいた。

物静かな印象を持つエナに対して活発、陽気といった印象を抱かせる。

キュロットスカートにTシャツ、身長は女子にしては高めで160?後半、エナから見るとすごく高く見える。

「おはようデユオ」

日本の経済が破綻するより前はエナとエナの兄、エナのいとこ、デユオの四人でよく遊んでいた。

ある時、エナの兄が四人全員に呼び名をつけた。

それが、エナとデユオであり、以後全員この呼び名で呼び合っていた。

「今日も朝早くからエナに会えて幸せだよー」

デユオがエナの頭をぐしゃぐしゃとなでまわす。

「こいつめ、こいつめ、かわいいーなーもう」

「私は可愛いと言われてもうれしくないよ」

エナはデユオの手を払いのけることもせず、デユオが手を離すのを待つて手ぐしで髪を整える。

小柄な体に少し幼さが残る顔、癖のある髪、大きな瞳にくっきりとした二重のまぶた。

確かにエナの容姿は可愛いと言って差し支えのないものであろう。

「あのね、私は」

「エナ、学校は楽しい？」

エナは割り込まないでほしいと思いいながらため息をつく。

しかし次の瞬間には笑顔を作り答えた。

「楽しいよ」

「そっか、つまんないかー」

「……私は楽しいって答えたんだけどね」

エナは苦笑した。

しかし、実際のところデュオの言うとおりで、学校生活は楽しいものではない。

「まあ、ここらは治安も悪いし、お金もない。活気なんてあるわけない。今の日本じゃ退屈なのは当たり前前の結果だよねー」

七年前に経済が破綻した時、教育機関も大打撃を受けた。

国の税収が減ったことによる大幅な費用削減により、今までいた教師達が次々に職を追われ、新しく低賃金で雇える人を探っていたため教師の質が大いに低下した。

当然学校が教材にかける金も少なくなる。

「教師の質も低けりややる気もない。ほとんどの授業が受ける価値もない。ただ卒業の単位をとるために生徒たちは通い、勉強する。部活もあつてないようなもの。そんな状況じゃあつまらないのも当然だよねー」

「でもそれが今の世なんだから。どこに行ってもそれは変わらない

……」

「変わらない

？」

「デュオ？」

デュオが急に黙り込み、エナの呼びかけも聞こえないほどに考え込んでいる。

しばらくそのままだったが道の途中でがばつと顔を上げた。

「変わらなければ変えればいいんだ！ どうしてこんなことに気づかなかつたんだろ！」

「どうしたの？ 急に叫んだりして」

「今はまだ内緒。聞いたらきつとびっくりするよ」

デュオは理由のない自信に満ち溢れた顔で太鼓判を押した。

「まあ何とかするから私に任せておきなさい」

「分かった。でも、早く行かないと授業に遅れるよ」

「うちの学校の授業に出ても大した意味はない気がするけどねー」

遅刻の問題は杞憂に終わった。

二人は教室に予鈴前に着くことができたが、教師は盛大に遅れてきた。

だがそれも毎日のこと。

いつも通りの光景。

いつも通りの退屈な日常だった。

## スタートライン（後書き）

はじめまして、柳川一歩という者です。

この小説は電撃大賞に見事一次予選で落つこちた作品を手直しして投稿しています。

この作品は僕の初めての作品ということもあり、他の人の意見が聞きたいです。

電撃大賞は一次予選で落つこちた作品に関しては選評を送ってこないなので、できれば読者の皆さんの意見等がありましたら言うっていただけると嬉しいです。

皆さんに見放されるようなことにならないように頑張りたいです。

## スタートライン その2

《七月 十二日 PM8:50》

学校では勉強を教えられることはほとんどなく、教科書だけ配られしばらく経つとテストがあるだけだ。

したがって、生徒は自分で勉強しなくてはならないのである。

エナが家に帰り授業中（ほとんどが自習ではあるが）にやれなかった分の勉強をしていると携帯電話がバイブ音を響かせた。

ディスプレイに表示されたのはデュオの三文字。

エナは携帯電話を手に取り通話ボタンを押した。

「もしもし、デュオ、どうしたの」

『面白いこと思いついた!!』

スピーカが壊れるんじゃないかと思うほどの大音量がエナの耳に飛び込んでくる。

「……………、何？」

『ちよつと今から学校に来て』

一方的に用件だけ告げられ電話は切られ、後にはツーツーという音だけがエナの耳に響いた。

《七月 十二日 PM9:10》

デュオと呼ばれエナは、学校に着くと敷地の北にある山へ回った。エナ達の通っている稲穂高等学校の敷地は東西に長い長方形をしており、高い塀で囲われている。

夜中に見るとまるで要塞がそびえているかにもみえる。

南に面している塀の一番東に正門、西に西門があるが、当然この時間は施錠されている。

しかし、学校に入れないかという点、そんなことはない。

塀の北側の中央にゴミ捨て場が塀にくっつく形で存在していて、

その壁に人が一人くらい通れる穴があいているのである。

幸か不幸か、ゴミ捨て場の隣にあるボイラー室のせいでゴミ捨て場が隠れており、ゴミ捨てを生徒達に丸投げしてきた教師達はその存在に気付かず、問題になることはなかった。

そのおかげで生徒は忘れ物等をして教室に入らなければならぬ時、その穴を通り、校舎に入ることができるのである。

「どうしたの、デュオ。こんなところに呼び出して」

堀の穴をエナがくぐるとすでにデュオの姿があった。

そこにいたデュオはともうれしそうに笑っている。

まるで、新しいおもちゃを買ってもらった子供のような笑顔で。

「ねえ、エナ。この学校を舞台にした戦争を起こそうよ」

デュオのその言葉にはまるで幻想のように現実味がなかった。

「……本気？」

「うん、本気だよ。別にドンパチやろうって言ってるんじゃないけどね」

デュオは校舎のほうを向きまるで空を抱きかかえるかのように手を広げる。

「この学校にたてこもるんだ。ここの学校の体育館は周りを堀に囲まれているし立て籠もるにはちょうどいいでしょ」

「具体的には何をどうするの？」

「……………そういう難しいことは全部エナが考えてくれるでしょ」  
「……………」

そんな満面の笑顔で答えられても、とエナが苦笑いを浮かべていると、デュオはわざとらしく咳払いをした。

「確かに、細かいところは全部エナに任せることになるから偉そうなことは言えないけどね……………ねえ、面白そうでしょ？ やってみない？」

つまらなかつた学校生活も楽しくなるんじゃない？ とデュオが呑気に微笑む。

「むちゃくちゃだね」

「だけど、

「だけど……………やってみたい」

そう答えてしまったのはなぜだろう、と今でも思うことがある。  
退屈だった日々を変えられると思ったからだろうか？

いや、違う、たぶんそうじゃない。

これはデュオが私にくれた、自分の手で現在を変えるチャンス、  
それとともにデュオ自身の願い。

「そうだね。やろう」

そして私とそのデュオの願いをかなえたいと思ったから。

いつの間にかエナの顔にもデュオの微笑みがうつっていた。

### スタートライン その3

《七月 十三日 AM6:30》

エナが朝ごはんを食べていると唐突にインターホンが鳴った。

エナがドアを開けるとやっぱりというかなんというか、デュオがいた。

「へーい！ エナ起きてる？」

「目の前にいるのにその挨拶は変だと思うよ」

「おー、そう言えばそうだ」

「それに私はたいていこの時間には起きてるよ」

「エナは早起きだ」

デュオが中に入り靴を脱いだ。

「例のこと。大まかな計画はできたよ」

まだまだ準備には時間がかかるけれど、という言葉をエナは付け足しながら、狭い六畳間の真ん中を陣取る背の低いテーブルの前に座るようにデュオに促し、自分も座った。

「で、どんな計画？」

「計画もいいけど、まず必要なのは立て籠もる理由だね」

「なんで？」

間髪いれずにデュオが聞いてくる。

「普通は理由があるから立て籠もるんだけどね。理由もなく立て籠もっても外にいる人たちにはどうしようもないでしょ。飲む要求がなければ降伏のしようがない。ける要求がなければ戦いようがない。ただの愉快犯じゃ何も始まらないよ」

「じゃあどういふのを理由にするのさー？」

「デュオも自分で少し考えてみて」

「えーと……」

デュオはしばらく考えていたが思いつかなかったららしく素直にホルドアップした。

「デュオ、リーダーになる気はない？」

「なんの？」

「これから私たちが作るチームの。チームといっても部活だけどね」  
そう言っつてエナは生徒手帳を開き、エナは部活動の決まりが書かれているページで手を止めた。

- 1、部の名前が決まっていること。
- 2、部長がいること。
- 3、部員が部長も含め五人以上いること。
- 4、顧問の先生がいること。
- 5、活動内容を明記すること。

以上の五点を部活動登録用紙に書き校長に提出し校長の許可を得れば部活動として認められる。

「この部活動を校長先生に却下させればこれを認めさせるといっ口実を得られるよ」

「でももし校長が認めちゃったらどうするのさ？」

するとエナはいたずらっぽく微笑んで一枚の紙をデュオの前に置いた。

「認められないものにすればいいんだよ」

その紙は部活申請用紙。

そして活動内容のところにはこう書かれていた。

・活動内容について

学校でのトラブルの解消。

学校が起こした問題で生徒が困っているとき、生徒の代わりに学校を懲らしめます。

「これはいい！ これなら認められるわけないし、万が一認められたとしてもこれなら楽しくなる。早くやろっ」

デュオは興奮して立ちあがり、玄関に向かって走り出した。  
否、走ろうとした、だ。

走り出そうとしたとたんデュオは盛大に転んだ。

「なにすんの！」

エナがデュオの足を掴んだからだ。

「まあ落ち着いてよ。ここまでやるからには私はこの戦争に勝ちたいよ。勝つてこのチームを作りたい。だから私たちは勝つための戦争をしようよ。たった二人で立て籠もっても見向きもされないよ」

エナは微笑みながらデュオをなだめる。

「じゃあどうするのさ？」

「学校の生徒全員を人質にするんだよ」

デュオはぶつけた鼻をさすりながら少し動きを止め、次に大きく息を吸い込んだ。

「ええええええ！！」

「声が大きいよ。近所迷惑になっちゃう」

「あ、ごめん」

デュオはエナに叱られ黙る。

「でも何で」

「私たちだけが立て籠もっても大人たちは最悪の場合、無視すればいいでしょ。それで実害はないし。でも生徒を人質にしているとすれば話は別。でも一人や二人だと話のもし消しにかかるかもしれない。だからだよ」

「なるほどね」

デュオがうなずいているとエナが部活動の申請書を取り出した。

「部長はデュオがなるんでいいよね。部員と顧問の先生は私がどうにかするよ」

「わかった。部長は私でいいよ」

デュオはエナに期待をこめた視線を送る。

「私たちの戦いはここから始まるんだよね？」  
それに対してエナは微笑み返したただけだった。

## スタートライン その4

《七月 二十日 PMO:15》

授業が終わり、明後日から夏休みになるということもあり、生徒達は少々浮かれていた。

「皆、浮かれてるね」

「まあ、明後日から夏休みだからしょうがないんでしょ。宿題もないしねー」

「デュオもうれしそうだね」

この学校では教師達が面倒くさがって夏休みの宿題を出そうとしない。夏休みの間、生徒達は野放し同然なのだ。

「部員の目星付けておいたよ。写真やどんなプロフィールがあるけど、見る？」

ついでに写真は盗撮したものであることはデュオには内緒だ。

「見る!!!」

エナが手渡すとデュオは写真を取り、めくりつつ眺める。

そして三枚とも見終わると顔を上げた。

「そうだよ」

一人目は背が低く、前髪がまつすぐ切りそろえられたおかつぱ頭の少年。

髪の毛の奥に見えるダウナーな瞳、線が細く、中性的な顔立ち。小柄なこともあり、女子だと言われたら一瞬、信じてしまいそうである。「一年C組男子、砂山 昇。クラスではいじめにあっていて孤立しているみたいだね。家でも父親と対立状態。趣味は野生動物へのえさやりだそうだよ」

「野生動物ってトラとか？ 危険なやつ？」

「野良犬や野良ネコ、カラス、ネズミとかみたいだよ」

「ふーん」

そう言うとデュオはそのことには興味がなくなっただかのように視

線を次の写真に移す。

「次はだれ？」

「次も同じく一年C組男子。長谷川 徹」

二人目はスタイルも顔も良く絵に描いたようなイケメンの青年。盗撮写真にもかかわらずなぜかカメラに向かって笑いながらピースサインをしている。

別に格好がどうかというわけではないのだが、どことなく軽そうなイメージがある。

「別の高校に通っていたんだけど彼が卒業した中学で問題を起こしたんだって。そのせいで元々通っていた高校で退学になってこの学校に来たんみたいだよ」

「問題って何をやったのさ？」

「そこまでは残念ながら解らなかつたよ」

最後の一人は、目つきの悪い三白眼に眉間に刻まれた深いしわ。写真を見た瞬間目をそらしたくなってしまうほどだった。

そして、私服であるこの学校でなぜか制服を着ている。が、制服によって受ける印象は真面目というよりもギャングかやくざのような雰囲気である。

「彼だけは二年生、二年A組男子、秋村 源一郎。彼は西栄高校からの転校生。やっぱり何か問題を起こしたらしいね」

西栄高校はここより少し離れたところにある難関校で入学出来れば胸を張っていいレベルの学校である。

「これで全員？」

「そうだよ」

エナはデュオから写真を受け取りカバンの中に資料をしまう。

「私たち二人を合わせてちょうど五人。三人が了解してくれれば顧問の先生以外の条件を満たせる」

「じゃあ今すぐ行こう」

デュオはエナの手を取り走り出す。

エナは黙ってデュオに連れられて行った。

《七月 二十日 PMO:20》

「たのもー!」

バンと音を立ててデュオが一年C組のドアを開けた。

普通、こんな来訪者が来ればなんらかのアクションがあるのだから、周りの生徒達は華麗にスルーしていた。

「む……」

デュオが相手にされずに少しむくれる。

見回してみると長谷川は教室にいなかった。

そのかわり砂山はいた。

数人の生徒に囲まれて。

「無視してんじゃねえよ!!」

周りを囲んでいた一人が威嚇するように砂山の机をたたく。

それでも砂山は周りの様子が見えていないかのように、焦点の合っていない瞳をしていた。

「っ、なんか言えよ。おらっ!!」

そんな状況でもやはり砂山の瞳はどこも見ていなかった。

まるで自分に降りかかる不幸から目をそらしているかのよう。

「てめえのその態度が気に入らねえんだよ!!」

再びその生徒の拳が振り上げられる。

それでも砂山の目はその生徒を見ていなかった。

「デュオ」

止めて。

とエナが叫ぼうとしたときにはすでに隣にいたはずのデュオの姿はなかった。次の瞬間、デュオの掌が先の生徒の拳を受け止め、教室中に高い音が響く。

「誰だてめえ!?!」

拳を止められた生徒は突然、間に入ってきたデュオに対して、驚きつつも怒りの矛先を向けた。

「これこれ、子ども、カメをいじめてはいけないよ。これで手を打つてくれないかい？」

いつもよりふざけた口調でデュオはしゃべりその生徒に飴玉を握らせた。

「ふざけるな！！ だれだよてめっ……ひっ …！」

突然その生徒の様子が変わった。

その視線の先でデュオが口調とは裏腹に恐ろしい形相をしてその生徒の腕を握っていたからだ。

「少し自重しようよ。でないよ、ねえ？」

ここでデュオがにやりと笑う。

「いたたたたた！」

デュオの指がその生徒の腕にめり込み、その生徒の顔が歪んだ。

「わかった、わかったから放してくれ」

その生徒が必死にデュオに懇願する。

デュオが手を離すとその生徒は転がるようにして教室から出て行った。

「あ、あの、ありがとうございます」

声のする方を見ると砂山がこちらを見上げていた。

「いつもこんな感じで殴られてるのー？」

「い、いえいえ。いつも大体こんな感じですけど殴られたのはこれが初めてです」

「ふーん」

デュオがどこかほっとしたかのようにする。

「まあいいや。あなた、私達のグループに入らない？」

「ぐ、ぐるーぷ？」

「そう、グループだよ」

そこでやっと、さっきまで会話には入れなかったエナが会話に入ってきた。

「ここでは詳しく話せないよ。ちょっとついてきてよ」

「え、ええ？」

砂山はデュオにすすると半ば引きずられるようにして教室をあ  
とにした。

## スタートライン その5

《七月 二十日 PMO:25》

「というわけなんだ」

「はあ……」

エナ達が何をしようとしているのを砂山に説明すると砂山は気のない返事をした。

結局エナ達が砂山を連れてきたのは体育館だった。

「で、どう？ 入ってまない？」

そんな様子を全く気にせずデュオが砂山にたたみかける。

砂山はそんなデュオの勢いに少したじろいだがすぐに元の調子に戻った。

「申し訳ないですけどお断りします。面白そうではありませんけど僕は目立ちたくないんです。それに僕じゃなくてももつといい人がたくさんいるでしょう？」

「いや、私達は他ならぬ君の力を貸して欲しいのさー」

その一言で砂山は少したじろぎ迷うそぶりを見せた。

「が、すぐ後に表情を変える。」

「誘うなら別の人を誘ってください！」

「あ、待って」

多少うつむき気味のまま、砂山は体育館から走り去って行った。

《七月 二十日 PMO:30》

もう一度、一年C組の教室に戻ってみても砂山はいなかった。エナ達は教室に残っていた生徒の一人に長谷川の居場所を聞く。

その答えは、

「ああ、それならさつき三棟の裏に行くところを見たよ」

とのことだった。

「喧嘩かな？ 見た目と裏腹になかなかアクティブな人だね」

「デュオにとつて校舎裏で連想されるものは喧嘩なんだね……」  
エナはその言葉に悲しげに答える。

エナとデュオは一年C組で得た情報で三棟裏へと歩んでいる途中である。

「まあとにかく早く行こうよ」

デュオはごまかすように言い、歩みを速くする。

そうこうしているうちに三棟についた。

裏にまわってみると

「あれは喧嘩というよりは……ナンパ？」

長谷川はカツアゲをしていたであろう今時、珍しいスケ番っぽい生徒達と、されていたであろう気の弱そうな少女の間に入って……ナンパしていた。

「と、いうよりスケ番ってまだいたんだね」

「私もスケ番が残っているなんて知らなかった。絶滅危惧種だね」  
デュオとエナの会話も関係なく長谷川達の状況は荒っぽい雰囲気  
が急激に薄れていく。

「君、かわいいね。夏休みに入ったら、映画館でもどう？」

「誰だてめえ！ 邪魔だから消えろ」

長谷川が気の弱そうな生徒に笑顔を振りまいているとカツアゲの邪魔をされたスケ番たちは怒り出した。

「あ、もちろん俺のおごりだよ」

「無視かてめえ！」

「まあまあ、落ち着いて。かわいい子がいたらナンパする。これって当然のことだろ」

「変なこと言ってるねえでとつと消えろ！ じゃねえとしばらく病院で暮らすことになるぞ！」

「分かった、分かった。つまりあんたはこう言いたいんだな。映画館には自分達も連れて行け、と」

「はああああ!？」

長谷川を中心に組み合わない会話が続いて行く。

「ちっ、なんだこいつ」

スケ番たちは相手にしていられないと言わんばかりにその場を去って行った。

「……ねえエナ、彼はああやって一応カツアゲを止めようとしたのかなー？」

「……」

その疑問にはすぐに答えが出た。

スケ番たちが去ってしばらくすると長谷川はくると少女の方を振り向いた。

そして長谷川はおびえている少女に笑顔を向けて一言、

「それで夏休みのことなんだけど」

## スタートライン その5（後書き）

最近、アクセス数を見ることができるとに気がきました。

感想や総合評価などがいつまでたっても0のままなので、もしかしたら僕の小説は誰にも読まれてすらいないんじゃないかと思っていたところでこれに気がきました。

決して多いとはいえない数ですが見てくれている人がいるということがとてもうれしかったです。

## スタートライン その6

《七月 二十日 PMO:40》

「夏休み、映画でもどう？」

デュオに殴られて長谷川は地面を転がる。

「エナを口説こうとは。油断も隙もない」

デュオは精神的に疲れたような顔をしている。

「で、そろそろ話してもらおうか」

長谷川が顔を腫らしながらも慎重に言葉を選び口にする。

「私達が何者であるか？」

「違う！ いや、それも聞きたいんだが今、一番聞きたいのは」

エナとデュオがごくりと唾を飲む。

「何でいきなりスタンガンを当てられて地面を転がることになったのか、だ」

「「おー」」

ポン、とエナとデュオは手を打つ。

それは普通口説く前にするものだろうとエナは思ったがとりあえずスルーすることにした。

「でもそれは校舎裏にいた少女にあんたがしつこく言い寄ってたからじゃん」

「スケ番が去ってオオカミがやってきた感覚だね」

「スタンガン当てるまでの事だという説得力がまるでないだ！？」

「ごめんなさい。まずは自己紹介から。私はエナこっちはデュオだよ」

「これはご丁寧に。長谷川徹です、って違う。誰も自己紹介しろとなんか言っていないし。第一偽名だろ、それ！」

「偽名とは失礼な。これはあだ名だよ」

偽名と言われてエナが少しむくれる。

「ここに連れてきたのは他でもありません。君に私たちが作るチー

ムに入ってもらいたいからです」

「チーム、チームねえ。そんな疲れることより、夏休みに入ったらさあ」

「私達はこの学校にひと泡吹かせたい。戦いたいんだよ。そのためにどうしてもあなたの力が必要なんだよ」

「会話のキャッチボールが……できない」

「……最初に会話を投げ出したのはそっちだよー」

エナはため息を一つ吐く。

「お願いだよ。私達はどうしても仲間が必要なんだよ。協力してくれない」

「やめろ！」

そこで長谷川から発せられた声は、想像よりも激しい声だった。本人もそこまでの声を出すつもりではなかったらしく自分自身の声に多少驚くような表情を見せた。

だがそのすぐ後にそんなことなど無かったかのように表情を戻す。「俺はもうそういうことはやめたんだ。もう一度やるうとは思わない」

エナはその声にひるまずに長谷川の目をのぞきこむ。

「いったい何があったの？」

「いや……なんでもない。怒鳴ってすまん」

長谷川は立ち上がって、立ち去ろうとするが一度立ち止まり、思いついたかの様に笑みを浮かべる。

「面白い話を聞かせてくれてありがとう。だけどお前たちの仲間になることは残念ながら出来ない。ごめんな」

そう言って長谷川は立ち去って行った。

## スタートライン その7

《七月 二十日 PM0:45》

「どうすんのさーエナ、二人に声をかけて二人とも仲間になつてくれなかった。元々全員が仲間になつてくれなくちゃ部員の人数が足りないのにー」

「ふふ、夏休みは長いよ。その間にゆっくり説得して行こうよ」  
「そう言いながら二人は二年A組へと向かう。」

二年A組についた瞬間、秋村がどこにいるかはすぐにわかった。なぜなら、秋村のいる机を中心にぼっかりと穴があいたように人が存在しなかったからである。

秋村本人は静かに自分の席で参考書を開いていた。

「すごい迫力だね」

秋村からはまるで寄らば切るといふようなオーラが漂っていて、話しかけてもすればすぐさま食い殺されそうな雰囲気があった。人垣が引いているのもうなずける。

「じゃあ話しかけるよー」

しかし、デュオは怖気づいた様子もなく、秋村に近づいて行った。「あなた、秋村源一郎ね。ちょっと話があるんだけど」

その言葉に反応し秋村がギロリと視線を動かす。

「……………話？ 俺にか？」

「そ、そっだよ」

エナの声が若干おびえ気味である。

「君を私達のグループに誘いたいんです」

「……………俺を？ なんの？」

「学校に喧嘩を売るためのグループだよ」

秋村は怪訝そうな顔をした。

「まるで、なんで嫌われ者の自分を誘いに来たのかって言うような顔ねー」

「……………だが実際にそうだろう。何か裏でもあるのか？」

「べつに裏なんかないよ。ただ単に君が優秀だということを知ってきたから入ってもらおうと思ったただだよ」

「……………優秀？　ただ勉強ができるだけだ」

「それだけじゃないよね。それだけじゃ文武両道をうたっている西栄高校に在籍してトップクラスの成績を残すことはできません」

「……………」

秋村はエナの顔をまじまじと眺める、それに対してエナは笑顔のまままだ。

「……………そこまで知っているなら俺がなんで学校を追い出されたかも知っているだろう。親友との喧嘩。俺は親友を病院送りにするほどの怪我を負わせた」

「それで」

その続きを待つかのようにエナが促す。

なぜエナがそのことを知っているのか、それについてデュオは何も聞かない。あえて聞かないのではなく、気にすらしていないのだろう。

「……………俺はお前たちのそのグループに入ることはできない。入るわけにはいかないんだ」

それから後、秋村は一言たりとも口を開こうとはしてくれなかった。

## 夏休み

《七月 二十一日 AM 8:30》

「ここがそうだね」

エナとデュオの目の前には砂山の表札。

そう、ここは砂山の家の前である。

エナとデュオは、夏休みの間に三人の説得を進めるため、まず砂山の家に訪れたのである。

「いるかなー」

「さあ、さすがにそこまでは分からないけど」

どこから調べてきたのか、エナの手元にある資料には三人の住所が追記されていた。

「押すよ」

デュオがインターホンに手を伸ばし、押すとピンポンと軽い音が響く。

しばらく無音だったが、ガチャツという音と共に誰かがインターホンに出た気配がする。

『はい』

インターホンに出たのは砂山よりも低い声、おそらく砂山の父親だろう。

「稲穂高校の生徒なんですが昇君はいますか」

『あんな奴など知らん!』

怒声、だがそのすぐ後に何かを殴ったかのような音が響いた。

『ごめんなさいね。今、昇はいないの。あなたたち、昇の友達?』

「ええ、まあ」

『ちよっとそこで待っててね。今ドアを開けるわ』

ドアを開けたのは四十代前半といった感じの女性だった。

砂山の母親だろう。

「あの子についていろいろと聞きたいから、リビングで話してくれないかしら」

「いいですよ」

なぜ砂山の母親がフライパンを持っているのかと、なぜ砂山の父親がそこに倒れているのが気になったが、その疑問は考えると怖い答えが浮かんできそうなのでエナはスルーすることにした。

「それで、あの子は学校ではどうなの？」

リビングのソファには砂山の姉らしき人がくつろいでいたが、話が始まると聞き耳を立て始めた。

いじめにあっていることを話そうかどうか一瞬迷う。

そして隠しても仕方がないと結論づけた。

「今、昇君はいじめにあっています」

「やっぱり」

砂山の母親はこめかみを押さえてため息をつく。

「あの子、家じゃ何も話さないから、学校でどうなっているのかが全く分からなくて」

「少なくとも友達が二人いてよかったじゃん」

砂山の姉が初めて口を開いた。

「そうねえ、でも二人とも女の子だしねえ」

はあ、と砂山の母親は再びため息をついた。

「いえ、あの」

「それはともかく」

砂山の母親は身を乗り出しエナとデュオに顔を近づける。

「どうかあの子へのいじめがなくなるように気を配ってくれないかしら」

「お任せください！」

ノリノリで答えたのはデュオである。

エナはそんなデュオの姿を暖かく見守っている。

「そお、ありがとうねえ」

「あの……………」

エナがおずおずといった感じに手を上げる。

「どうしたの？」

「昇君とお父様はなぜ仲が悪いのですか？」

それを聞くと砂山の母親は疲れたような笑みを浮かべた。

「夫があの子の買ってきた猫缶をただの缶詰だと思って食べちゃったのよ」

父親は猫缶を紛らわしい所に置いたことを、そのせいで自分が猫缶を食べてしまったことに怒り、砂山はせっかく買ってきたえさを父親に食べられてしまったことに怒ったのだそうだ。

それを聞いたエナとデュオは苦笑いしか出てこなかった。

## 夏休み その2

《七月 二十一日 AM9:00》

砂山の母親の話では、砂山はおそらく近くの公園にいるだろうと  
のことだった。

「すごい」

公園についたエナは思わず呟いた。

そこにいたのは地面を埋め尽くさんばかりの動物達。

犬、猫、カラス、ネズミ、鳩、その他多くの動物達（おそらくは  
野良）が、そこで喧嘩もせず鎮座した。

「悪いけど、砂山君まで道を開けてくれないかな？」

エナが語りかけると動物達は、その言葉を理解したかのように道  
を開ける。

その中心にいた少年 砂山は急に開けた視界の中、エナと  
デュオの姿を捉える。

「あなた達は……………この前の……………」

「エナとデュオです」

「そう、エナさんとデュオさん。あなた達は気味悪がらないんです  
か？」

「いや、壮観だとは思っけれど」

そして砂山は眉間にしわを寄せる。

「あなた達の仲間になるという話は断つたはずですけど」

「うん、断られたよ。だけど私達は一度断られたくらいで諦めるわ  
けにはいかないから。だからまた来たんだよ」

「僕は静かに生きたいんです。ほっておいてください」

「あなたがどう思おうと今の学校じゃ静かになんて生きさせてなん  
てくれないし、面白くもない出来事に巻き込まれ続けるだけ」

「こっちこそあなた達がどう思おうと関係ないです。僕に仲間はい  
りません」

砂山の周りの動物達が悲しげに鳴く。

「デュオ、もういいよ。彼の所にはまた来よう」

エナがデュオを呼びその場から立ち去る。

デュオは名残惜しそうに何度か振り返りながらもエナを追って公園から姿を消した。

（そう、僕は一人でいい。僕はいつでも一人だし、これまでもずっと一人だ）

そしてえさやりを再開しようとするやと急に動物達が騒ぎ出した。

何だ、と考える暇もなく砂山の足が浮く。

誰かに襟をつかまれ持ち上げられたのだ。

否、誰かではない。

相手はわかつている。

「おいおい、砂山。こんなところで何やってんだよ」

砂山をいじめているクラスメイトだ。

周りの動物達がいつそう騒がしくなる。

「ちっ、飼い主もウザけりや、ペットもウザいってか」

連中の中の一人が近くにいた野良犬を蹴り上げる。

野良犬の口から悲鳴のような鳴き声が響き、その野良犬は地面を転がってそのまま地面に伏した。

「やめろ!!!」

「わっ! 何だこいつ!!」

砂山が暴れだし、クラスメイト達があわてる。

「僕の仲間に手を出すな!」

「っ!」

そして取り押さえようとしたクラスメイトの手を誰かが受け止める。

そう、初めてあの二人組が教室に来たときのように。

二人は最初のと看と何一つ変わらずそこに立っていた。

「そうだ砂山。あんたには仲間がいる。こんなに多くの仲間が」

クラスメイト達の手を止めたのはまたしてもデュオだった。

「まだ認めてもらっちゃいけないけど。私とエナもあんたのことを仲間だと思っている。これだけを言いにきた」

そしてデュオは砂山のクラスメイト達を一瞥する。

「そんでもって、あんた達に言いたいことはたった一つ」

デュオが掴んでいる腕を引つ張り、デュオ自身より大きく重いはずの体を持ち上げる。

「私の仲間に出すなああああ！」

そして振り回されたその体はデュオの手を離れ、砂山のクラスメイトをボーリングのピンのように吹っ飛ばした。

「ひいいいいい！」

そして一人が逃げ出し、それを追うようにして全員が逃げ出す。

砂山に向けてデュオが手を差し出す。

「大丈夫ー？」

いつの間にか砂山は腰が抜けたかのように地面に座り込んでいた。

「ええ、ありがとうございます」

デュオの差し出した手を砂山は掴んで立ち上がる。

「あっ」

砂山の搾り出したかのような声に立ち去ろうとしたエナとデュオが振り向く。

「何で僕なんですか？ 何で僕なんかを仲間にしてくれるんですか」

こんな情けない僕でも、という言葉が砂山の言葉には見えるかのようだ。

「何言ってるの。あんたが気に入ったから以外に仲間にする理由は私には無いよー。それと」

デュオは快活に笑う。

「さっきも言ったけど私達はとっくにあんたを仲間だと思っているよ」

砂山は不意に出てきそうな涙を必死にこらえる。

「あなたのあだ名は今日からテセラだよ。よろしくね、テセラ」

そして砂山は、否、テセラはそういつて差し出されたエナの手を

カ  
い  
っ  
ぱ  
い  
握  
り  
締  
め  
た  
。

### 夏休み その3

《七月 二十一日 PM0:35》

「お前……………暇なんだな」

玄関のドアを開いた長谷川はエナの姿を見てため息をついた。長谷川は着替えてこそいたものの頭には今起きたばかりですと言わんばかりの寝癖がついていた。

「夏休み初日から家でごろごろしてる人に言われたくはないですけどね」

「いやいや、ある日は日がな一日ごろごろ過ごし、またある日は力いっぱい遊び、31日に宿題と闘い、敗れ去る。これが夏休みの正しい過ごし方じゃないか。」

今日は一日中ごろごろと過ごしそうと思っていたけど君が来てくれたんならデートにすると思いますか」

一方、デュオとテセラは秋村のほうの説得に向かった。  
デュオは

「あんなやつとエナを二人きりにするなんて危なすぎる」

と呟きながら、迷うように行つては引き返しを繰り返していたが、「トラウマで承諾しないんなら、説得はエナさんにしかできないって言ったのはデュオさんでしょ。僕らが行つても邪魔なだけですって」

と言うテセラに引つ張られていった。

「と、いうわけでデートにしよう」

「私としてはあなたとデートするわけにはいかない理由があるんだけど」

「いいじゃん、いいじゃん。それとも彼氏でもいんの?」

「いや、彼氏はいないけれど」

「じゃあいいじゃん。今日一日くらいさあ」

「私はあなたをグループに誘わなくちゃいけないから」

「……………」

「はぁ、と長谷川はため息をついた。

「何度も言うけど俺は仲間にならないぜ」

「機動隊の相手をしたくないから？」

「……………」

「うん、もちろん。新聞にも載ったじゃない」

「デュオの前では知らないといったが本人に隠す必要はない。

長谷川はしばらく無言で悩んでいるように黙っていたがそのうち切り出した。

「俺が高校に上がってすぐに母校の中学がつぶれることに決まったんだ」

「ゆっくりと、一つ一つ、言葉を選ぶように。」

「俺はさ、母校がそれなりに好きだったし。思い出の場所でもあり、お世話になった場所でもある。だから学校をつぶすのに反対して同窓生を集めてその中学に立て籠もってハンストしてたんだ。そんな時、奴らが来た」

長谷川達の声は学校側には届かなかつたのだ。彼らは対話の道をとらず、機動隊の投入という手段を選んだ。

そして、教室にスタングレネードが投げ込まれ、混乱している間に全員捕まってしまった。

「幸い、リーダーであった俺だけが咎められることになって、他の奴らはお咎めなしで済んだけどな。俺はこの学校に転校せざるおえなくなったんだ」

「なるほど」

「なあ、エナだっけ」

「うん」

「お前達は怖くないのか？ 機動隊と戦うことが」

「……………」

二人の間にしばし沈黙が横たわる。

「……………」

「どうして？」

「だって仲間がいるから」

エナはしっかりと長谷川の目を見つめる。

「仲間がいるから怖くない。仲間がいるからがんばれる。仲間がいるから戦おうと思えるんだよ。どうして君を仲間を選んだかもその内わかってもらえと思う。それまで、そのためには私達の仲間になってほしいんだ」

「……………」

「今はこれくらいしか言うことしかできないけれど」

長谷川はしばらくの間、顔を伏せていたがため息をつくと共に顔を上げる。

「……………いいだろう。そこまで言われて引き下がるのは男が廃る

！不肖、長谷川徹。お前達の仲間として共に戦おう！」

「ありがとう」

エナは緊張が解けたかのように笑う。

「それなら、今日から君はペンデだよ。いい？」

その時のエナの笑顔はペンデにそれだけでも入ってよかったと思わせるほどのものだった。

《七月 二十一日 PM 1:05》

トゥルルルと電話の呼び出し音が響く。

エナがデュオに向けて電話を掛けているのだ。

『はい、もしもし』

「デュオ、こっちはペンデを仲間に取り入れたよ。そちらはどう？」

『どうもこうも、秋村が家にいないんだけど』

### 夏休み その3 (後書き)

初めてポイントが入り、お気に入り登録してくれた人が出てきたりしました。

とてもうれしいです。

もっと多くの人にもそうしてもらえよう頑張ろうと思います。

## 夏休み その4

《七月 二十一日 PM 1:20》

「おい、デュオ」

「あ、エナ。やっときたね」

デュオとテセラはエナとペンデよりも早くついていた。

「大正解だよエナ。秋村がいた」

十五分前。

《七月 二十一日 PM 1:05》

『どうもこうも、秋村が家にいないんだけど』

「旅行に行ってるとかはねえのか？」

「ないと思うけどね」

エナは少し考えてから電話にこたえる。

「情報によると図書館に通うことが多々あるそうだから。そっちに

行ってみよう」

『わかった。じゃあこちらでも図書館に向かうから図書館前で待ち合

わせよう』

《七月 二十一日 PM 1:20》

そして図書館の中にはノートと参考書を広げている秋村の姿があった。

「うおっ。あいつ、夏休みなのに勉強してやがる!」

「いや、長谷川君。別になんら不思議なことじゃないよ」

「あ、お前。砂山か」

「二人とも、お互いのことは知ってるね。新しい名前の自己紹介だけしておいて」

「僕はテセラです」

「どうも、俺はペンデだそうだ」

二人の短い自己紹介が終わるとエナたちは図書館の中へ入っていった。

「こんにちは、秋村君」

「……………この前来たのは全員じゃなかったのか」

「増えたんだよ」

秋村は深くため息をつく。

「……………お前たち、まだそんなことをやっていたのか」

「やらなくちゃならないことがあるから」

再びため息。

「……………止めとけ。今の御時世何をやるにしても、どうせ

」

「どうせうまくいかないのだから」

エナの言葉に秋村が固まる。

声こそ違っていたのに、秋村には一瞬自分がしゃべったのかと思っただけ。

「そういう風に事件の時に親友に言ったんだよね。こんな風に」

エナがしゃべり始める。

エナの声なのにその場にいた人間にはなぜだかエナの声じゃないかのように聞こえてくるその声で。

「『俺さ、人を集めて一つのグループを作ろうと思ってるんだ』」

「『……………ほう、どんなグループを作ろうとしてるんだ』」

「『この国を変えるためのグループさ。自分たちの意見を通すために仲間を集めて、人を集めて発言権を増して、俺たちでこの国を動かしていけるようにするための。それでまずはお前に

そして、エナはここで一呼吸を置く。

「『……………つまらん』」

「『え？』」

この言葉はエナの口だけでなく秋村以外の全員の言葉でもあった。

「『……………そんなことをしても世の中は何も変わらない』」

「『そ、そんなのやってみなくちゃわからないだろ！』」

「『……………やらずともわかる。選挙権さえ持たない高校生が集まった程度ではいくら集まったところでたいしたことはできない』」

秋村が震えているかのような様子で聞いている姿がエナの言葉が本当にあった言葉であることを肯定しているかのようにであった。

「『そ、そんなことは、そんな……………』」

「『……………それはただの夢物語にすぎん』」

エナの言葉からでも打ちひしげられている秋村の友人の様子がわかる。

「『……………お前なら。わかってくれると思ってたのに』」

「『……………ともかく』」

秋村がいすから立ち上がる。

「『バカみたいなのは止めるんだな』」

その言葉が終わると同時に秋村がエナに詰め寄ろうとするがデユオがすぐさま間に入って二人を遮る。

「……………お前、そのやり取りをどうやって知った！」

「そのときに周りにいた他の生徒たちの証言の情報と君とその親友の情報を元に、思考をトレースするとだいたいこんな会話だったのかなと思っただ」

おそらく、その後には喧嘩が始まったんだろう。

「君は親友に当たり前のことを言って無謀なことを止めようとしたんだよね。だけどそれが親友の癪に障った」

「……………お前に、何がわかる」

「私にはわかるよ。だけどあなたにはわからなかった」

「……………っ！」

「わかるうとしなかったのは君だよ。そしてそれを君は後悔している」

秋村はもはや怒りを通り越して疲れたかのような顔をしている。  
それは、たぶん親友を理解することのできなかつたことに対する  
自分のふがいなさに。

「その過ちを完全に消すことになるわけでもないし、ましてや代わりになることにはならないけれども、少しでも償う気持ちがあるなら私たちに協力してくれないかな」

「……………どうして俺なんだ」

「たぶん、その親友と同じ理由だよ。君がいいから」

「……………」

秋村はうつむき、糸の切れたマリオネットのように動かない。

「……………確か、部活成立の条件は五人以上部員がいることだったな」

「そっだよ」

「……………名前は貸す、協力はできん」

「そう、ありがとう」

そしてエナがきびすを返して外へ向かうとデュオたちもそれに習った。

## 新学期

《七月 二十一日 PM 1:40》

「おい、エナ」

「何？」

「たとえさっきのことをあいつが悔いていたとしても俺らの仲間になることって何かの償いになるのか？」

「ならないよ」

「やっぱりか……」

ペンデがあきれたような顔をする。

「どういうことですか？」

「つまりエナは関係ないことを焚きつけて、その後悔を利用して仲間に引き入れようとしたってこと」

その言葉でテセラが苦笑いする。

「まあ、完全に無関係じゃなかったようだけどな……」

《九月 十四日 PM 0:15》

時間としてはお昼時。

今は昼休みの時間である。

「ふっ、ふふっ、ははっ、わっはっはっは、ついに、ついに完成した！！」

「わー、デュオが悪役っぽい」

せーの、とデュオが音頭をとる。

「……作業終了おつかれさまでした」「……」

叫んだ後、デュオは学校の体育館の床に突っ伏した。

「ほんとに疲れたよ」

「後は顧問の先生を頼むだけだからね」

「その顧問の先生だけ……エナ、どうするの？ 教師側に情報が

漏れると困るけど」

「大丈夫、顧問は高村先生に頼むつもりだよ」

「へえ、高村先生に」

高村先生は三年前にこの学校に就職した先生でこの学校の中では一番若い先生だ。

なんでも、この学校の卒業生らしく、生徒に理解があつて生徒からの人気がある先生である。

「おいおい、いいのかよ。いくら高村先生とは言つても教師だぜ。教師陣に計画が漏れる心配が有るんじゃないやねえの？」

それに反論したのはペンデだった。

「高村先生はこの学校の卒業生だよ、それも七年前の事件があつて世間が一番バタバタしていたころの、ね。この学校に対する不満は知っているはずだよ」

「けど何かの拍子にぼろつと漏らしちゃうかも知れないだろ」

「大丈夫だよ」

エナは力強く言い放った。

「漏らす暇もないよ。計画の準備はもうできているし」

エナの顔が引き締まる。

「計画は今日スタートするんだから」

## 新学期 その2

《九月 十四日 PM0:50》

「お前たち面白いこと始めようとしてるな」

これは私たちの部活動申請書を見た高村先生の言葉。

「わかりますか？」

「わかるさ。これでも数年前には学生だったんだ」

そして先生はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「それで？ いったい何をするつもりなんだ？」

「それは先生にも言えませんよ。言ったら学校側に漏れるかもしれないし。先生が教師である以上言うことはできませんよ」

「おれはこの部の顧問になるのを断ることもできるんだが」

二人とも沈黙し、その間に重たい空気が漂う。

先に静寂を破ったのは高村先生だった。

「教師としては止めるべきなんだろうけど……いいだろう。顧問になつてやる。顧問の名前としておれの名前を使ってもいいぞ」

先生はそう言つと申請書にサインしてくれた。

さつきまでのぎすぎすした空気などまるでなかったかのような笑顔である。

「ありがとうございます」

エナは笑顔でお礼を言い申請書を受け取る。

「一つ聞きたいんだがいいか？」

「なんですか」

「もし俺が断っていたらどうするつもりだった」

「……」

再び、エナと高村先生との間に険悪な空気が流れる。

今度は先に静寂を破ったのはエナの方だった。

「いやですねー先生。断られなかったからいいじゃないですか」

「真面目に聞いているんだ」

エナは何か言い返そうとしたが高村先生の顔がいつになく真剣だったのを見て言葉を詰まらせた。

そしてしばらく考えてから 笑った。

それは妖艶でそれでいてどこか悲しみを感じさせる、そんな笑みだった。

高村先生はそのとき得体のしれない寒気を感じ思わず何も持っていない左手を強く握りしめた。

その手の中にべっとりとした汗がにじみ出してくる。

「弱みの多い教師を探して、その弱みを使って脅そうと思ってました。何せこの御時世ですから、弱みのある教師には事欠きませんよ」

「……そうか」

「先生、質問はもうこれでいいですか？」

「ああ。だが、意外だったな、本当のことを話してくれるとはな」とするとエナは急にいつもの笑顔に戻った。

「それでも先生のことを結構信用してるんですよ」

「そうかい。じゃあ、がんばれよ」

「ありがとうございます」

エナが立ち去った後高村先生はしばらくの間その場から動くことができなかった。

### 新学期 その3

《九月 十四日 PM 1:05》

「高村先生のサインもらってきたよ」

「……よっしやあああつ!!」「」「」

エナが体育館に戻るとデュオ、テセラ、ペンデの三人が踊り出さ  
んばかりの勢いで喜んでいた。

「後はこれを校長先生に叩きつければ全てを始められるよ」

そう言ったエナはくるとデュオのほうを振り返り申請書を手渡  
した。

「私にできるのはここまで。これを校長先生に叩きつけられるのは  
部長であるデュオだけだよ。やってくれるよね」

「当たり前!!」

聞かれてから間髪いれずにデュオが答える。

「大船に乗ったつもりで待っていてよね」

ペンデが泥船の間違いじゃないのか? と茶々を入れたがエナと  
デュオの耳には入ってこなかった。

そしてエナは見るものを幸せにするような微笑みを浮かべた。

「うん。信じているよ」

《九月 十四日 PM 1:10》

「何度も言っているけど、君、これは認められないよ」

「だからなぜなんですか!!」

校長室の中を校長の猫なで声とデュオの怒鳴り声が支配する。

「部の成立の条件は十分に満たしているはずです!!」

デュオは校長室の机を思いっきり叩いた。

少し太り頭が禿げあがった五十代の校長と、目を怒らせているデ  
ュオを並べてみると悪いことをして校長室に呼びだされた子供を校

長がいなししているようにも見える。

「だから、ね、学校としてはこのような活動内容を認めるわけにはいかないんだよ」

「生徒のことを考えてこそその学校でしょう！ 生徒達の事を考えた活動の何が悪いんだ！！」

「もちろん生徒あつての学校です。しかし、私達はそれと同時に校内の風紀も守らねばならないのです」

デュオと校長はエナ達の部の活動内容である、

《学校でのトラブルの解消。学校が起こした問題で生徒が困っているとき、生徒の代わりに学校を懲らしめます》  
という内容でもめているのである。

否、デュオがもめるように誘導しているのである。

「私達の部が風紀を乱すとも言うのか！！」

「その通りです」

「もういい！」

デュオは悔しそうに下唇を噛み言い捨てた。

「覚えていろ。この禿校長！」

《九月 十四日 PM1:10》

「大丈夫なのかよ。デュオにこんなことさせて。失敗したらどうすんだよ」

「デュオは単純だけど頭は意外にいいんだよ。これくらいのことです失敗なんてしないよ」

ペンデはエナの言葉に一瞬、驚いた顔をしたがその次の瞬間には納得したとでもいうような顔をした。

「そっか、ついこの間知り合っただばかりのおれたちよりもエナのほうがずっとデュオのことを知っているよな」

その時体育館の扉が開き、デュオが帰ってきた。

## 開戦

《九月 十四日 PM1:40》

放送室、そこにはロープで縛られ床に転がされた放送委員達の姿と放送器具をいじっているエナ達の姿があった。

放送委員の代わりに機械をいじっているのはエナで、放送室のマイクを握っているのはデュオである。

「準備できたよ。5秒前、4」

残りの3、2、1と声を出さずにエナが指を折ってカウントする。カウントがゼロになったときデュオは叫んだ。

「全校生徒のみんなとクソツタレの教師達、聞こえる？ 私はデュオ。あるグループのリーダーを務めている。この学校の、退屈な日常と戦っている一生徒だ。学校でのトラブルの解消を旨とした新部活動の申請をしに行ったが認められなかった！ 私達はこのとつくの昔に腐っている学校に、戦争を仕掛ける」

その放送が始まるのを2年A組で秋村は聞いていた。

「……………あいつら。本当に……………」

その声はほかの生徒の騒がしさにかき消され、誰の耳に入ることもなかった。

ついに始まった、もう後戻りはできない。

横を向いて見るとテセラとペンデが緊張した面持ちになっている。そして、同時にこの学校で普通に授業を受けているはずの秋村にもこの放送が届いているだろう。

「学校側が降伏する場合は三棟の屋上に校長が一人で来い。そうすれば私達はこの戦争を終わらせよう。降伏しない場合、私達は最後の一人になるまで戦い続ける！」

エナは放送器具の電源を落とすと小さく、それでいてチームの全

員に聞こえるように囁いた。

「さあ、楽しいゲームの始まりだよ」

その言葉を合図に全員が動き出した。

《九月 十四日 PM2:00》

ペンデに与えられた任務は校内にいる生徒達を捕虜にすることだった。

「全く、面倒くさい役を押しつけてくれたもんだ」

そう言いながらペンデは一年A組の扉を開けた。

中にいた先生や生徒の視線が集中する。

いままで寝ていたであろう生徒までもが起き出したようだ。

正直、教師も寝ているってどうなんだ？ とペンデは思った。

(なんともまあ。暇な人間が多いなあ)

ペンデは心の中でため息をつく。

「おう、長谷川か。どうした？」

教師がペンデに反応する。

「教頭先生からの伝言を伝えに来ました」

「ほう、なんだ」

この学校では校長先生は仕事を怠けて何もしないので、何かの命令は教頭から来る場合が多い。

「さっきの放送の件で臨時に職員会議を開くそうです。至急、会議室に集まれとのことですよ」

めったに仕事をしない教師は仕事の臭いを嗅ぎつけ少し嫌そうな顔をした。

「ちっ、面倒くさいな。しょうがない、今日は自習だ」

(生徒達の「元から自習だろ」という心の声がびんびん伝わってくるんだが)

教師が教室から出て行き、生徒達が騒ぎ出す。

ペンデが教師のいなくなつた教卓に立つと教室中の生徒の視線が

集まってきた。

「よしよし、生徒諸君聞いてくれ。さっきの放送を聴いてくれたか？ 聴いてくれてたのなら話は早い。俺はその放送を流したグループの一人、ペンデだ」

辺りの生徒達がざわめき始める。

それをペンデは手で制した。

「今日の授業はこれにて終了だ。これからそれどころじゃなくなるからな。俺達は学校と戦争を起こす。もしその祭りが見たい奴は体育館まで来てくれ。それで協力してくれるとなお嬉しい」

生徒達がまたざわめき始める。

今度はペンデも騒ぎを鎮めようとはしなかった。

「俺が言いたいのはそれだけだ。じゃあもう家に帰っていいぞ」

ペンデはそれだけ言う一年A組をあとにした。

一年A組の教室からは帰り支度をしている音が聞こえてきた。

(これで種はまいた、あとは芽が出るのを待つだけ……だよな?)  
そう考えているとペンデの背後から三人の生徒が走って追ってきた。

「おい、長谷川！ 俺はすぐにも協力するぞ！」

「そうだ！ こんなおもしろそうなことが起きているのに何もしないなんて名が腐るってもんさ！」

「いや、なんの名だよ」

そこで交わされるバカみたいな会話。それを聞いたペンデは思わず口元をほころばせた。

芽はちゃんと出始めた、そうペンデは思えたのだ。

## 開戦 その2

《九月 十四日 PM2:00》

エナは三棟の屋上にいて空を見上げてじっとしていた。学校側が降参するのを待ったために。

(まあ、校長が来るわけないんだけどね)

そう思っているとエナの耳が静かだがはつきりとした、獲物を狙う肉食獣のような足音が聞こえた。

(来た)

屋上が上がってきたのは校長の姿ではなく、身長が二mを超えているのではないかと思うほどの大男だった。

「お前がああ放送を流した犯人グループの内の一人か？」

「校長ではなく、あなたが来たということは交渉は決裂ですね。鶴田先生」

その大男は、やり方が暴力的すぎるとい理由で警察を依頼退職に追い込まれ、腕っ節を見込まれて教職に就いた鶴田だった。

そしてエナの言葉は自分が犯人グループのうちの一人であるという事でもあった。

「はっ、当然だ」

鶴田が鼻で笑う。

もちろん、エナも相手が降伏してくれるとは思っていなかった。

社交辞令のようなものだ。

「お前がなあ……。お前はもっとまじめな生徒だと思っていたが」  
鶴田は少しの間考え込んでいたがしばらくして自分の役目を思い出した。

「まあ、なんというか、俺は教頭に屋上にいる奴を捕まえて来いと  
言われている。このままおとなしく捕まるか？」

エナが首を横に振る。

「まあそうだろうな。そうなると俺はお前を暴力的な方法を使って

でも捕まえなくてはならないのだが、それでもいいか？」

「私は今、捕まるわけにはいかないのをごめんごうむります」  
そう言ってエナは走り出し、鶴田はそれを追う。

二人の鬼ごっこが始まった。

### 開戦 その3

《九月 十四日 PM2:00》

エナが教師と鬼ごっこを演じていた時、デュオは椅子や机を運んでいた。

「どりゃあああ！」

エナに体育館にあったパイプいすを正門に積み上げバリケードを造るように頼まれていたからだ。

両手に女子とは思えないほど、否、男子でも持ち上げるのすら困難な量の椅子や机を走って運んでいた。

デュオが正門前につくとシニールな光景が目に見え込んだ。

正門から入ってすぐにの広くなった場所に犬が、猫が、鳥が、その他多くの動物が大量にひしめいていた。

「な、何これ」

デュオが呻くとその声に反応したように周りの動物がデュオに向かって襲い掛かって来た。

「ストップ、その人は僕の友達です」

デュオはそのままの体勢で足を使って迎撃しようとしたが横合いに掛ってきた声に動きを止めた。

「あ、テセラ」

動物達の中にたたずむようにしてテセラが広場の中央にいた。

「何これー」

デュオはさつきと同じ言葉を繰り返す。

「エナさんにデュオさんがバリケード造るまでは人を近付けないようにって言われたんです」

「なんか嬉しそうだねー」

「友達に何かお願いされたのって初めてですから。なんだか少し嬉しいです」

「いじめを受けていたから？」

デュオは言ってから自分の失言に気づいた。

「あ……ごめん。いじめなんて他人に知られたいものじゃないよね」

テセラはそのデュオの反応に苦笑した。

「いいですよ。どうせすぐにばれることですし。教室のアレ、見られてましたしね」

テセラの顔に影が落ちる。

「僕の場合、まあ、いじめのこともありました。が積極的に友達を作ろう、って思わなかったんです」

いつになくテセラが饒舌に話す。

(もしかして、聴いてほしいのかな)

「だからこそペンデさんみたいな人がうらやましいんです」

「どうして?」

「彼は、僕と違って人と話すのが得意です。デュオさん達とも初めて会ったはずなのにまるで前から知っていたかのように会話することが出来る。それができてうらやましいんです」

テセラは話し終わると視線を落とした。

そしてデュオは、左手を大きく振りかぶって

テセラの背中を思いっきり叩いた。

「痛あつっつ!!」

大きな音がして周りの動物達が飛びかかりはしなかったが戦闘態勢に入った。

「しけた顔をしない」

「な、何で?」

「人としやべるのが苦手だって言ってたけど」

デュオは笑顔を作ると言い放った。

「今、私にたくさん話してくれたじゃん」

「……………」

「もう私達は友達なんだからさ」  
だから。

「友達がいないなんて悲しいこと言わないように」

デュオが自分の掌を鳴らす。

「はい、わかっただらさ。バリケード造るの手伝ってよー。ここを守るのは動物達がいれば十分でしょ」

そう言つとテセラの顔がぱつと輝いた。

## 開戦 その4

《九月 十四日 PM 2:35》

結果から言うとエナと鶴田の鬼ごっこはあっけなく終わった。

エナはお手製のペイントボールを鶴田の顔に投げつけて、用意していた縄梯子で校舎を降りたのだ。

そして今、エナは体育館に着いて一休みしているところである。体育館にはたくさんの生徒達が集まってきた。

その様子をエナは静かに眺めていた。

（体育館に集められた人たち、縛られているわけでもなく、扉に鍵をかけているわけでもないのに一人いとして出ていかない）

その様子が今の教育が生徒達からどう思われているかをはっきりと物語っていた。

そう思っているとエナはポケットの中に振動を感じた。

ポケットから携帯電話を取り出し通話ボタンを押す。

『エナ、一応のバリケード出来たよ。ちゃんとパイプいす同士を結束バンドで繋いでそれを門に結束バンドでくりつけたよ。でもこれくらいだとすぐに撤去されちゃうんじゃない？』

電話してきたのはデュオだった。

『お疲れ様、それで大丈夫。ひとまず外から中が見えなくて、撤去するのに手間がかかればいいよ。そこにテセラもいるよね。一緒に撤収してきてよ』

『わかった』

電話が切れ、エナは携帯電話をポケットの中にしまった。

（ペンデからの連絡がない）

その事実がエナの不安を掻き立てる。

（捕まっちゃったのかな）

その時、体育館に備え付けられたスピーカーから音が出始めた。

『えー、この騒動の犯人に告ぐ。お前達の仲間を一人捕まえた。返

してほしければ今すぐこの馬鹿騒ぎをやめろ！』

(やっぱり)

その時、スピーカーから妙に元気な声が出た。

『あー、エナ、悪い。捕まった』

## 開戦 その5

《九月 十四日 PM2:10》

話は二十分ほど前のことである。

「なあこれっておかしくないか？」

そう言ったのは会議室に集められた教師の内の一人だった。

「何がだよ」

「なんで教頭は来ないんだ？」

その会話にまわりの教師達も集まってきた。

「ただ単に遅れているだけなんじゃないのか」

「あの教頭が自分で呼んでおいて遅れるか？」

「そう言えば鶴田先生も来てませんね」

会議室内のざわめきが大きくなりうるさいほどになった。

「なんかいやな予感がするな」

「よし、岸田先生は三棟屋上へ、残りは校舎内の確認を」

そして会議室に集まっていた教師達は屋上とさっきまで自分たち

のいた教室へと急いだ。

## 救出作戦

《九月 十四日 PM2:45》

デュオとテセラが体育館に帰ってきたときエナは少し焦っているように見えた。

「どうしたの、エナ」

「ペンデが教師達に捕まっちゃったんだよ」

「なるほどねー。それじゃあ、私が助けに行く。テセラを連れていくよ。テセラ、ついてきて」

「待ってデュオ。デュオとテセラにはやって貰わないといけない仕事があるから。二人にはそっちをやって貰わないと」

「じゃあどうするのさー。ペンデを見捨てるか？」

「私は別に助けに行かないなんて言っていないよ。ここにフリーで動ける人間が一人いるでしょ」

デュオがぴたりと動きを止める。

「そう、私が行くよ」

「エナが……？」

デュオがエナをまじまじと凝視する。

「いくらなんでも無茶だよー。エナは荒仕事には向いていないし。たぶんペンデが捕まっているのは教師達がたくさんいるところだろうから。大体、ペンデがいる場所も分かってないから教師達のいる場所を何箇所か襲撃しないといけないし。一人じゃ」

デュオの言葉をエナが人差し指をデュオの口にあて止める。

そしてエナは笑みを作り言葉を紡いだ。

「デュオが荒仕事を得意としているように私にも得意なものがあるから。デュオはデュオにしかできない仕事をして。ここは私に任せ」

それだけ言うとエナは体育館をあとにした。

## 救出作戦 その2

《九月 十四日 PM2:45》

体育館の中はこれから何が起きるかを友達と語り合っている生徒達の声でずいぶん騒がしかった。

ペンデは一応成功したらしくAからDまである一年生全員にクラス程二年生がいた。

ここから見るにどうやら一棟は一度、全体を制圧出来ていたようだ。

おそらく二棟を制圧する途中で教師達に捕まったのだろう。

(私は私にしかできない仕事をしろ、か)

デュオの近くには校舎の占拠に協力してくれた生徒達がいた。

「どうする。教師達は一棟を占拠し直してこっちにつ攻めてこようとしているぞ」

そのうちの一人がデュオに報告する。

「それなら一棟前でバリケードを造って防戦に徹するよー。一年A組を襲撃して机を奪取、そのままにかく数をたくさん一棟前から広場までの道を塞ごう。何人かはバリケードを校舎裏の細道に積み上げて。大至急ー、急いで」

デュオの指示で全員が急いで一棟へと向かう。

「大丈夫でしょうか」

横を見るとテセラが不安な顔でデュオを見上げていた。

今のところデュオ達に協力してくれているのは十人程度、それに対して教師の総数は二十人以上、完全に劣勢だ。

「大丈夫、エナが帰ってくるまでもてばいいんだから」

「でも……」

デュオはテセラのほうへ向きなおり笑顔を見せる。

「エナは必ず帰ってくるよー」

《九月 十四日 PM 2:40》

ペンデは手足をガムテープで縛られ三棟の物置部屋の床に倒れていた。

周りには教頭先生を含めた教師達がいた。

「お前達の人数や持っている武器の量などを答える」

「やだね」

教師のけりがペンデの鳩尾に突き刺さる。

蹴られたペンデは苦痛で顔を歪め、体をくの字にし、盛大にせき込む。

「自分達の立場をわかっているのか？ さっさと吐いたらどうだ！」

「悪いけど簡単に仲間を売るわけにはいかないんだよ」

ペンデはうずくまり、少々むせ返る。

(あとはエナ達がちゃんとやってくれんだろ)

そのとき、足音とともに新しく教師が入ってくる。

「犯人グループのエナと名乗る生徒を捕まえたとの連絡が届きました」

「なっ!？」

### 救出作戦 その3

《九月 十四日 PM 2:45》

その頃、エナは教師に捕まっていた。

「お前で二人目だな、いい加減にあきらめたらどうだ」

苛立った顔の教師とは反対にエナは笑っていた。

「まだ諦めませんよ。きつと私達の仲間が助けに来てくれると信じてますから。それに先生達はまだ私も含め二人しか捕まえていないじゃないですか。こっちのほうで圧倒的に有利です」

「くっ」

この反応を見てエナは心の中でほっとした。

(教師達にこちらの人数はばれていない)

実際に中心として事件を起こしているのがあと二人しかいないと知っていたらエナ達が拠点としている体育館を力技で攻め落とすだろう。

「だが一棟を取り戻した。体育館を攻め落とすのも時間の問題だ」

一棟を制圧していたのはペンデを中心とした生徒達だけだったのだから彼が捕まってしまったのならそこが制圧されるのは当たり前前である。

実際、ペンデは自分が捕まるときに他の生徒を逃がしていた。

人がいなければそこを占拠することはできない。

会話をしているうちにエナは三棟の物置部屋にまで連れてこられた。

「エナ！」

中から驚いたような顔をしたペンデがいた。

ペンデは芋虫のように這ってエナに近づこうとしたが教師に背中を踏まれそれ以上進めなくなる。

「ほお、あまり頑丈じゃなさそうなのが来たな。よし、こうしよう」  
その場にいた教頭先生がこの場で初めて喋った。

「ペンデだかペンタだか知らないがそのお前」

「ついさつき名乗った名前くらい覚えてほしいよな」

ペンデのぼやきを無視して教頭が続ける。

「さっきの質問の答えを吐け。吐かないようならこのエナとかいう奴を痛めつける」

「なっ！」

ペンデが教師の足の下で暴れるのをやめる。

「さあどうする？」

「くっ」

しかし最初に話したのはエナだった。

「先生達こんなところに集まってていいの？ そろそろ私達の仲間が反撃を開始する時間だけど」

ペンデが「えっ？」という顔をし、教師達がどよめく。

「こんなはつたりにだまされるな！」

教頭が怒鳴り教師達の混乱を収める。

「こいつらに反撃できるような戦力はない。だからこそあの体育館に立て籠もって」

「前線から連絡、敵が反撃を開始、一棟前にバリケードが造られて攻めあぐねているようです！」

「なに！」

予想外の事態におちいり、教頭が絶叫した。

「ね、いったとおりだよ」

エナが言うと教頭は悔しそうに唇をかみしめた。

「なにをしている。こんなところにいるいで全員応援に行かんか！こいつらは私が見張っている」

言われて教師達があたふたと物置部屋から出て行った。

そして、物置部屋につかの間の静寂が訪れた。

「（おいエナ、どうしてここにいるんだよ。体育館にいればよかったらろ）」

ペンデが教頭に聞こえないように口を出来るだけ動かさないでし

やべる。

「（ペンデを助けに来たんだよ。あたりまえでしょ）」

「（はああああっ!? 俺のことなんてどうでもいいんだよ。ブレインがいなくなったら困るだろうが）」

「（どうでもよくないよ。ペンデは私達の仲間なんだよ。それに）」

喋りながらエナはペンデの印象が初めて会った時と違うな。と考えていた。

（最初はただ軽い人かと思ってたけど。そうでもないみたいだ）

「（エナ?）」

言葉を途中で切ったエナをペンデがいぶかしむ。

「（なんでもないよ。それに私達の作戦は一人でも捕まっていたら成功しないんだよ。ほら、もう脱出するよ）」

ペンデの手に何かが当たる。

見るとエナの手にはカッターがあり、ペンデの手に巻かれていたガムテープを切っていた。

エナの靴下とズボンの裾がまくれている、おそらくそこにカッターを隠していたのだろう。

「（お前、まさかわざと捕まったのか?）」

「（えへん、すごいでしょ。さ、隙を見て脱出するよ）」

会話している間にエナはペンデの足に巻かれていたガムテープを切っていた。

「（わかった）」

だが、隙を突く必要はなくなった。

なぜなら、物置の扉がゴバンツと冗談のような音を立てて吹き飛んだからだ。

そして、ドアをけり破った人影はそのまま教頭を取り押さえる。

「秋村!」

「秋村君! どうして」

扉を蹴破って現れたのは秋村だった。

「……………そのエナとやらがここに連れ込まれたのを見てな」

秋村が言うには、どうもエナが連れ込まれた後、部屋の外で聞き耳を立てていたらしい。

「それで。答えは出たの？」

「……………ああ、お前たちの必死な様子が伝わってきた。遊びでも、冗談でもないというその必死さが」

「ははは、仲間になるだけのことなのにずいぶんと回り道をしてくれたもんだぜ」

ペンデが笑いながら立ち上がる。

「で、エナ。秋村の呼び方は次からどうしたらいいんだ？」

「秋村君。君には私たちの仲間になってもらうにあたって、エクシ、と名乗ってほしい。いいかな？」

「……………かまわん。どう呼ばれようと俺は俺だ」

「で、次はそいつの処分だが」

「教頭先生は縛って動けなくしたら放っておいていいよ」

「……………わかった」

教頭の顔が心なしに青ざめる。

「待て」

そこで教頭の表情がほつとしたかのようになった。

「そいつは俺が拷問して情報を引き出すのに使う」

「……………そうか」

教頭の顔が絶望に染まった。

震え上がっている教頭を見て笑顔を作った。

「安心しろ。お前らの拷問と違って痛くはないから。ただ」

教頭の手足をガムテープで固定していたペンデはさっきとは違う、どこか残酷さを感じられる笑みをした。

「ここまでやってくれたんだ。覚悟だけはしてくれや」

教頭の口から声にならない悲鳴が上がった。

## 救出作戦 その4

《九月 十四日 PM2:55》

「守れ、守りきるんだー!!」

うおおおお！ という雄叫びを上げデュオの指示で生徒達がバリケードを崩そうとしている教師達を攻撃し始める。

机等を盾にし、その後ろから生徒達がBB弾を射出する電動ガスガンを連射している。

「すごいですね……」

ぼつりとテセラがつぶやく。

「こんな数のガスガンとBB弾を集められるエナさんってすごいですね」

「そつちかい……」

すごい迫力だ等のセリフを予想していたデュオがずっこける。

「どうやってこれだけの物を買集める資金をエナさんは集めたんですか？」

確かにこれだけ集めるには子供の小遣い程度では無理だ。

ましてやエナには家族がないので無駄遣いできるだけのお金はない。

「株」

デュオが答えづらそうに言う。

「株？ でもエナさんの年齢だと株って買えませんでしたよね？」

「エナは三年前、家族を交通事故で失ってるから。だから生活費を稼ぐために私のお父さんに代わりに買ってもらって株の売買をして稼いでるんだよー」

他にも節約したりという頑張っているんだけどねー、とデュオが苦笑する。

「へー、株ってそんなに儲かるんですか」

儲けている人もいれば損をしている人も多くいるのだが、それに

気付かないテセラが気楽な事を言っている。

「さ、私は前線の指揮をしに行くから正門の方は頼んだよ」

「了解しました」

エナ達がこの学校の敷地は東西に長い。

そこに東から順に体育館、一棟、二棟、三棟が北、南と互い違っている。

渡り廊下は一棟と二棟、二棟と三棟の二階同士を結ぶものがある形であり、門は南側外壁の東端に正門、西側外壁の真ん中に西門の二つだけだ。

つまり、正門と校舎裏の細道を塞いでしまえば体育館への道は各棟にはさまれている道と渡り廊下のみとなる。

（エナは必ず二人を連れて戻ってくる。それまでに出来るだけ状況を有利にしなくちゃ）

## 救出作戦 その5

《九月 十四日 PM3:05》

エナ、ペンデ、エクシの三人は三棟の中を走っていた。

「外は教師の数が多から渡り廊下を使ってデュオ達のもとまで戻るよ」

「オーケイ」

「……………わかった」

教師たちはもうすでに他の生徒は退避させたらしく、どの棟にも生徒はいなかった。

たまに教師と会うこともあったがエクシがすぐさま沈めていく。

「案外もろいな。なんで教師たちは編隊を組んで歩いてないんだ？」

「たぶん、戦線の内側に敵がいることに気付いてないんだよ」

「そりゃラッキー、おっと」

先頭を進んでいたペンデが立ち止まる。

エナ達がいる少し先 一棟と二棟をつなぐ渡り廊下に大量

の教師達がいた。

渡り廊下で生徒と教師で戦闘を繰り広げているのだ。

この学校の渡り廊下の幅は2メートル弱で、人が横に4、5人並ぶともう一杯となる。

「（どうすんだエナ。このままじゃ通れない）」

「（外に出よう。外には教師が多いけど。密集してない。ここよりはチャンスがあるはずだよ）」

「（教頭から聴きだした情報を早くデュオ達に伝えなくちゃならぬいな）」

結局ペンデがやったのはただのくすぐりだった。

（本来なら裸にひんむいてケータイで写真を撮ってそれをネタに脅すところだがエクシはともかくエナには教育上よろしくなさそうだし。命拾いしたな、教頭）

「？ どうしたの、ペンデ」

同年齢のペンデに教育上の心配をされているとは知らずエナが質問する。

「なんでもない」

ペンデは適当に切り上げ黙する。

だがペンデのくすぐりは相当つまいらしく教頭はすぐに情報をこぼした。

「じゃあ戻ろう、デュオ達の待つところへ」

そう言ってエナ達は二棟の一階についた。

## 救出作戦 その6

《九月 十四日 PM3:20》

その頃、デュオ達は攻めあぐねていた、というよりも押され気味だった。

「やっぱり数で負けているっていうのは結構なディスプレイアドバンテージだねー」

バリケードのおかげもあり、一棟前は何とか守れているが校舎の中ではそうもいかない。

防衛点が校舎全体と広いせいで戦域が拡大され数の多い教師側が有利となっている。

今のところは何とか二階にある渡り廊下の位置でせめぎ合い、一棟に残っていた教師達からも入口から階段、渡り廊下までの道を守れているが、どこかが破れると全滅する。

「このままじゃ……」

デュオがぼやいた時バリケードの向こう側が騒がしくなった。

そしてデュオの耳はその中からよく聞きなれた声を聞き分けていた。

「バリケードの向こうを総攻撃、教師達を散らせて！」

気付いたらデュオは叫んでいた。

そしてバリケードをよじ登るとそこにはよく見知った顔があった。

「デュオ！」

「やっと帰ってきたね。待ちわびたよ」

デュオはバリケードの向こうから来たエナの手を取り、こちら側に引っ張り上げる。

その後ろから、ペンデとエクシがバリケードを越えてきた。

「よし、帰還成功」

「……まさか本当に帰って来れるとは思わなかった」

「デュオ、戦況は？」

その問いにデュオは少し鬨りを見せる。

「……押され気味だねー。一棟前は大丈夫そうだけれど一棟の中を  
守りきるのはきつそう」

「そう、じゃあ当初の予定通りデュオはペンデと体育館に戻って。

体育館にいる生徒達が協力してくれるように説得して」

「分かった、ペンデ、行くよ」

「了解」

デュオとペンデは一応周りを警戒しながら体育館へと走って行っ  
た。

「エクシにはこれからしてもらうことに協力してもらおうよ。いい？」

「……………別にかまわないが。何をすればいい？」

その言葉にエナは微笑みをこぼしながら言った。

「ちよっと罫を張りに」

## 反撃開始

《九月 十四日 PM 3:55》

一棟と二棟をつなぐ渡り廊下にいた教師達は奇妙に思っていた。さっきまでバリケードを造り改造ガスガンで教師達の足を止めていた生徒達が、伝令の生徒一人が来て何事か告げると全員撤退してしまつたのだ。

「妙だな……」

（畏か？ それとも戦線を維持できなくなるとふんで早めに撤退したか）

だつたら好都合だ、と教師はほくそ笑む。

生徒達はなぜか自分たちの中から捕まる者を出したくないらしいが教師側にすれば、どうせ全員捕まえなくてはならないので一か所に固まってくれるのなら都合がいい。

そう思つて、教師達が一番大きな階段があるところへ行くと

防火扉が閉まつていた。

「なんだこりゃ」

この学校の防火扉は普段は階段側の壁にあるが、緊急時に扉を閉めるような形になっている。

「妨害のつもりなのか？」

教師は防火扉を押してみたが開かない。

何か障害物でも置いて扉があかないようにでもしたのだろうか、と思ひながら教師は防火扉についている小さい扉の方へ行く。

防火扉自身は向こう側へ開くがそれについている小さい扉は手前側に開く。

だから障害物があつてもこちらは開くはずだと思ひながら小さい扉の取手に手をかけた。

その扉は確かに開くには開いた。

「ギヤー」

ただし、開けた途端、教師の目の前に大量のボールが現れた。

野球ボール、テニスボール、バスケットボール、サッカーボール、ラグビーボール等々のさまざまなボールが。

驚くべきことにそのボールの中にはピンポン玉やボーリング玉まであった。

「何があつた！」

扉を開けた教師が大量のボールに吞まれ辺りの教師が集まってきた。

「やられた、奴ら防火扉の向こうにボールを積んでやがつた」

辺りから、なんで階下に転がって行かないんだろう、とか二階から一階へるところにバリケードでも造つてあるんだろう、とかこれを全部どけるのは骨だぞといった声が聞こえてくる。

「とりあえず、他の外へ出られる場所を探そう」

一階に降りることのできる階段は他にもある。

そういうことで非常階段に差し掛かった時、悲鳴が聞こえた。

そう、悲鳴。

何事かと他の教師が見に行くと、先頭を行っていたはずの教師達が網で捕まって宙吊りになっていた。

その様子を見に来た教師達も次の瞬間宙を舞っていた。

その足には縄が結ばれていてその先は一度、天井にねじで張り付けられた滑車を通じて窓の外に出ていた。

床を見ると環の形になった縄がいくつも置いてあつた、ばれにくいように床の色に塗つてあるというおまけつきだ。

有効であつた証拠に浮足立っていた教師たちは見事にこの罠に掛かつた。

そして窓の近くにはさつき撤退したはずの生徒数名が。

おそらく教師が縄のエリアに足を入れた時に重りかなんかを付けた縄の一端を窓から投げ落としたのだらう。

「この餓鬼！」

生徒を追って数名の教師が教室の中に足を踏み入れた。

しかし、その教師たちはそこで無重力のような体感を得ることになった。

階段で先頭の教師達がかかったような網の罫に部屋の入り口で捕まったのだ。

生徒達はそれを見届けると窓から教師を吊っている縄を伝って下りていった。

まだ無事な教師達が部屋に入って行くと数名の教師がそこで転んだ。

床に粘着塗料が塗っており、そのせいでこけたのである。

なおも数名がそれを飛び越えて窓から顔を出すと下から生徒達のガスガンでの掃射を受けた。

たまらず後ろに下がるとそこには先ほどの粘着塗料が。

## 地獄絵図

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図がそこに展開されていた。

その惨事を見た教師の一人がポツリと言った。

「とりあえず、一棟に残っていた先生と連絡を取って集まろう」

## 反撃開始 その2

《九月 十四日 PM 4 : 10》

教師たちは一棟三階の一室に集まってきた。

先ほどまでロープや網で宙吊りにされていた者は血が頭に上り顔を真っ赤にし、粘着塗料に捕まった者はべたべたする不快感に眉をしかめていた。

「よし、床にそれらしき罠もない、入っていいぞ」

先頭の教師が告げ、そのあとを複数の教師が続いた。

しかし、教師は床を見るだけで気付いていなかった、天井がいつもよりも低いことに。

確かに入っても何も起こらなかった。

全員が入りきるまでは。

最後の一人が部屋に入ったとたん後ろで引き戸がボタンと閉まり天井が開き、そこから液体が降ってきた。

その液体は最初こそただの液体だったが、しばらく時間がたつと粘性を持ち始め、完全に固まった。

《九月 十四日 PM 4 : 15》

「……………教師達が集まった部屋の隣の部屋に潜んでいた奴らから報告があった。一棟内の教師達を一網打尽するのに成功したようだ」  
エクシの視線の先には教師達を完全に封殺する作戦を立てた者の姿があった。

「うまくいってよかったよ、あの偽天井を造るのは数日かけたからね」

そこに空気に反応して固まる液体を入れるにはもっと苦労したけど、とエナは朗らかに笑った。

他の罠は後から用意したが最後の罠だけは時間がかかるので最初

から用意しておいたのだ。

「……………どうして分かった」

「何が？」

「……………教師達が集まるであろう部屋を、なぜおまえは数日前にすでに知っていた」

「ああ、そんなこと」

そこには本当に何でもなさそうな顔をしたエナの姿があった。

「選択肢を潰していえばいいんだよ。下に行こうとすればどんな罠が待っているかわからない、二階も危険、となると三階に上がりたくなる。それなら三階の非常階段が一番近い教室に罠を仕掛けておけばいい」

「……………なるほど。上へ行く非常階段に何も罠を仕掛けなかったのはそういうわけか」

「そういうわけ」

エナは得意顔で腕を組んだ。

「……………これならデュオが生徒達を説得できなくても押しきれるのでは」

「それは無理」

エクシの言葉をさえぎるようにしてエナが言う。

「……………なぜだ」

「もうすぐ一棟前の戦線が破られるからだよ」

「……………元々一棟にいた生徒達も投入できるのか？」

そしてエナの顔から笑顔が消える。

「教師たちはこれから防災扉を閉めてくるよ」

その瞬間、校舎から避難訓練用の非常ベルの音が響いた。

## 体育館での説得

《九月 十四日 PM 4:10》

たくさんの生徒が見守る中、デュオとペンデは体育館の舞台の上  
にいた。

デュオは緊張で汗ばんだ手を使いマイクを握る。

放送器具を扱うのは捕虜にした放送委員に任せている。

「皆聞いて」

デュオの声に会場全体がしんと静まり返る。

静寂の中、デュオは声を張り上げる。

「私はこの戦争を起こしたチームのリーダー、デュオ！」

辺りからどよめき声がし始める。

「静かに、今から状況を話すから静かにするように！」

デュオは会場が鎮まるのを待ちマイクを握りなおした。

「私達はみんなの知つての通りこの学校に戦争を仕掛けた。だけど私達には人数が足りない。教師達のいる教室を占拠する戦力も、下手をすればここを守るだけの戦力も。だから皆に協力してほしい。罪はすべて私達が被る。だから皆に迷惑はかけない。だから手伝ってほしい。報酬はこの退屈な日常からの脱出！」

退屈な日常からの脱出と聞き会場の空気が変わる。

だが、

「協力したことがばれて成績下げられるのは嫌だしなあ」

そんな誰かの声で体育館に不安が波紋のように広がって行く。

「もしかしたらそれだけじゃなくて退学にさせられるかも」

「疲れるし面倒臭いからやりたくない」

「面白いことが起こるっていつから来たんだ。危険を冒してまで手  
伝う気はない」

そう言った声が体育館のあちこちから聞こえてくる。

「お前ら、それで恥ずかしくないのかよ！ 目の前で仲間が戦って

いるのにただ野次馬根性で見てるだけ！ 何もしない！ それでいいのよ！」

聞くに堪えなかったのかペンデが声を張り上げる。

「お前らが始めたことだろう。なんで俺達が協力しなくちゃいけない！」

「お前らでやってお前らで終わらせればいいさ。俺達は見学しに来ただけだ」

だが帰ってくるのは反論の言葉だけである。

憤るペンデの肩に手が置かれる。

振り返ってみると、デュオがあきれ顔で見ていた。

「なつてないねー、説得っていうのはこうやるんだよ」

デュオはペンデを押しつけ前へ出る。

「変わりましたデュオです」

何も特別なことは何一つ言っていない。

さつき話していたペンデから変わってこれから私が話す、ということと言ったにすぎない。

なのに、体育館の空気が変わった。

デュオのその雰囲気。

デュオのその威厳に。

そして何より、デュオのその力強さに。

「あなたたちは何か変えてみたいことってある？」

それはとても単純な言葉、だがデュオの発したその言葉は深く、そして広く人々の心に染み込んでいく。

「変えたい、変えてみたい。でも力がない。だからやらない。そう思ったことはない？ そう思ったことがあるのなら今、これはチャンスだよ」

ただの言葉、かけ値のない言葉。

しかし、デュオの一挙手一投足が人の心を動かしていく。

「目の前で起きている波、それにちよつと乗るだけでいい。それだけで他ならぬあなたたち自身が歴史を変えられる。そういうチャンスだよ」

体育館は完全に静まり返り、デュオの声だけが体育館を支配する。「罰を与えられるのが怖い？ そんなこと気にする必要はない。勝つのは私達。もし負けてもあなたたちは私達に捕まっていただけの人質、罰せられはしない」

横でペンデが目を見張っている。

そして同時に納得する。

この人が俺たちにリーダーなんだな、と。

「立ちあがれ！ そして変える！ この学校を！ この街を！ この街を変えるのは」

ここでデュオは一回言葉を区切る。

「あなたたちだ」

うおおおおおおおおお、と雄叫びが上がり、体育館全体が震える。

デュオは振り向きペンデを見る。

「説得っていうのはこうやってやるんだよ。戦いで兵士の心を奮い立たせるには誇りに訴えかければいい。ペンデがやったようなことで正しい」

でもね、とデュオは言う。

「革命を起こす人民を動かすのは誇りじゃなくて立ちあがるための勇気だよ」

《九月 十四日 PM 4:10》

「ふふ、順調だな」

教員室では救出された教頭が悪役の香りを強烈に醸しながら笑っている。

教員たちは先ほど避難訓練用の非常警報のスイッチを押したのだ。この学校では、そのスイッチが押されると防災扉が閉まり、ロックされる。

一応、防火扉についている小さい扉は開くのだが、開かれたかどうか教員室から確認でき、防災のためのものなので人が押さえていないと小さい扉は閉まってしまうのだ。

つまり、校舎内の生徒達の動きは教師達に筒抜けになるのだ。

「ふん、やはり防火扉が閉まったときには居場所が割れないように動かないよう言われているな。グループA、三階の第三ブロックまで移動。グループB、二階の稲穂ブロックまで移動。そのとき見つけた生徒をとっ捕まえるように」

「教頭！」

教頭が各教師に命令を下そうとしたところに防火扉の状態をモニターしていた教師が大声を上げる。

「何があった」

「一棟の一階、入り口の場所から防火扉が順々に開いていって、いまだに閉まりません」

「それはつまり」

「大量の生徒が一棟に押し寄せたということです」  
教頭はそこで絶句した。

## 体育館での説得 その2

《九月 十四日 PM 4 : 15》

「はい、どうぞ」

エクシはそう言つてエナにいちまいの紙を渡された。

「……………これは？」

「これに書かれたとおりに行けば安全に二棟のその印の場所に行けるよ」

その紙には一棟から二棟二階、二年D組の教室までの道が赤い線で記されていた。

「……………ここに行く去何があるんだ」

「向こうの切り札」

エクシはしばらく考えていたがすぐ顔を上げた。

「……………鶴田教師か」

「正解」

今のところ教師の中で最大の駒である鶴田が捕まったという報告はない。

エナは教頭だったら鶴田をどこに待機させるかを予想したのだ。

「……………わかった。行つてくる」

エクシはエナの手から紙を受け取り、一棟の中へと進んでいった。

《九月 十四日 PM 4 : 25》

あちこちで教師が捕まり捕縛されていた。

「おいエナ、これ以上はさすがに警察沙汰になる。学校側も警察沙汰にはしたくないだろうし。今もつ一度交渉を持ちかけた方がよくないか？」

「まあ普通ならそうなんだけどね」

バリケードの向こうにいた教師はロープで縛られて正門から放り

出された。

そして、一棟の中にいた教師達も同じような運命をすでに たど  
っていた。

「おい、普通ならってどういうことだ？」

その中でペンデは疑問をエナにぶつけていた。

「私達の目標は部を認めさせることだけじゃないから」

「まさか、機動隊に勝てるって言うのか」

ペンデのその声はこころなしにか震えていた。

「勝てるよ」

「それにそこまでやらなきゃつまらないしねー」

そこへデュオも会話に入ってきた。

「だけどっ」

「はい、そこで終了ー」

デュオはペンデの言葉をさえぎる。

「あとはエナが何とかしてくれるよ」

「なんとかって……」

そこでペンデがエナを見るとエナは不思議と無表情だった。

「やっぱりまだ怖い？」

ペンデは自分が唾を呑む音が聞こえたような気がした。

「いや、大丈夫だ」

ペンデは踵を返してエナから少し距離を取った。

そして、教師側はほぼ壊滅、学校は生徒の手によって占拠された。

### 体育館での説得 その3

《九月 十四日 PM 4:25》

エクシが教室のドアを開けるとそこには予想通りの人物が立っていた。

「秋村か。お前も犯人グループの一人だったのか。いや、それよりどうしてここがわかった」

「……………うちのブレインが教えてくれた」

そこにいた鶴田は犬歯をむき出しにしてにやりと笑った。

「まあどうしてここに来れたかなんてどうでもいい。せつかく骨のありそうなやつが来たんだからな」

そして、鶴田はその笑顔をいきなり消した。

「勝負だ」

その瞬間エクシが床を蹴り一気に鶴田との距離を詰める。

勢いに乗せ、強烈な蹴りが放たれるがその蹴りは鶴田が拾い、構えた机によって防がれる。

「元警察官をなめるなよ」

「……………」

エクシは蹴り足を引き床につけ、ボクシングで言うところのジャブを連続で放つ。

しかしその拳はことごとく鶴田の持つ机によって阻まれる。

「警察官に負けることは許されん、だからその場にあるものを何を使ってでも必ず勝たねばならない。お前に負けることもできん」

「……………別に警察官は関係ないだろう。全国の警察官のほとんどは鶴田教師のようなことはできまい」

エクシは姿勢を低くして力を溜め体のばねを使い、強烈なひじ打ちを放つ。

そのひじ打ちは鶴田が構えていた机の台の部分を割り、弾き飛ばした。

「甘いぞ」

だが、その腕は盾を破られることを予想していた鶴田に掴まれていた。

「吹っ飛べ」

投げ方も何も無い、ただ単純につかんだ腕を引つ張り投げ飛ばす。それだけでエクシの巨体は教室の隅まで投げ飛ばされた。

「……………っ!？」

遠のきかけた意識を、頭を振って戻したエクシの目に飛び込んできたのは大量の机だった。

とつさに転がって避けるとさっきまでエクシのいた場所に破壊音を響かせながら机が降ってくる。

「そら、そら、そら！ 避けないと潰されるぞ」

原因は鶴田。

鶴田が周りにある机を手当たり次第に投げってくるのだ。

(…………… 向こう側の机がなくなるまでしのぎ続けようか)  
否、出来るはずがない。

鶴田は机を投げては別の机があるところに移動している。

(…………… こちらも机を投げ返すか盾にしようか)  
それも無理。

机なんて変な形をしている物をまともに投げるのは至難の業だ。盾にしても、その盾と同じ質量をもつ物がいくつも飛んでくるのだ、防ぎきれとは思わない。

(…………… 相手はリーチというアドバンテージを生かしたいはず。なら接近戦を嫌う。なら自分の近くに全ての机が集まるのを待つか)  
馬鹿なことだ。

一か所に留まり教室中の机が全て飛んでくるまで耐えきれないはずがない。

(…………… ならば)  
手近にあった机を威嚇として投げる。

(…………… 賭けになるが仕方がない)

逃げるばかりだったエクシが反撃してきたことに意表を突かれた鶴田は一瞬動きを止めるが、その机は鶴田の横にぶつかるだけだった。

だが、机に気を取られたことにより生じた一瞬の隙。

その隙が生まれた瞬間エクシは鶴田に向かって全力で距離を詰める。

ただひたすらに前に進むことだけを考えて。

「ごさかしい！」

エクシの接近に気付いた鶴田はエクシに向けて机を投げる。

連続で投げることを重視していた今までとは違い、一投だけ、

全力で。

「……………ああああああああああああ……………」

最早、自分が何を叫んでいるのか、それすらエクシには解らなかった。

ただ全力投球で飛んでくる机に対して全力でシヨルダータックルをかます。

肩からすさまじい音が聞こえ飛んできた机がはじかれる。

しびれて動かない肩を無視してエクシはひたすらに突き進み、ついに到達した。

鶴田の目の前へ。

「なっ！」

投げられた机を無視して走ってくる人影に鶴田は驚愕する。

もちろん近づかれただけで鶴田の負けが決まるわけではない。

遠距離からの一方的な攻撃ができなくなったただけだ。

鶴田はエクシを迎撃するために裏拳を放つ。

しかし、本当に驚愕するのはこれからだった。

「……………おおおおおおおおおお……………」

エクシは鶴田の腕、肩という順に足を掛け、鶴田の体を駆け上がった。

そして、驚愕する鶴田の顔面に向かって重力に従い踵を思いつき

り振り下ろした。

大音量が響き鶴田の巨体が地に伏す。

「……………これでしばらくは起き上がれないだろう」

エクシは教室に背を向け教室を出た。

(……………自分は変わらないのであろうか)

西栄高校にいた時、親友が起こそうとしたことが正しいとは思えなかった。

だから止めようとした。

結果、喧嘩沙汰となり、エクシは親友をその手で叩きのめした。

本意とは違ったが、結果として病院送りになった親友は計画を断念せざる負えなくなった。

その代償としてエクシは転校を余儀なくされたが。

(……………あの頃から何も変われずにやはり力でしか解決できないのだろうか)

そうなる親友の考えの方が正しかったのだろうか、と。

殺気。

殺気を背に受けとっさにエクシは振り向き防御態勢を取る。

次の瞬間、強烈な蹴りを受けエクシの体が吹き飛んだ。

「……………馬鹿な」

エクシが見上げるとそこには鶴田の巨大な影があった。

「……………気を失ってなお、戦い続けるというのか」

どんな化物だ、と思いつつも必死に転がると、さっきまでエクシの頭が存在した場所を巨大な足が踏みつける。

鶴田の目は焦点が合わずに辺りをふらつき、人影をとらえるとそこを攻撃してきた。

(……………まず、い)

エクシの体は先の戦いと不意打ちによってほとんど動かない。

(……………このまま戦い続けていると負ける)

そう考えながら転がりながら逃げ回っていると背中に固い感触。どうも逃げ回っている内に壁際に追い詰められたようだ。

気を失った鶴田は拳を握り、エクシに向けて振り上げる。

(……………やられる)

エクシは来るべき衝撃を予想し目をつぶり、体を縮こまらせる。しかし次に聞こえた打撃音はエクシの体からではなかった。

エクシはゆっくりと目を開け轟音のした場所へと視線を移動させる。

そこには殴るために腕を振り上げたため、無防備になった鶴田の脇腹へ叩き込まれた足があった。

次の瞬間、鶴田の頭に手が、膝のところには先ほど蹴りを入れた足が添えられ、鶴田の巨体が横に半回転した。

そのまま地面に落ちた巨体は今度こそ動かなかった。

「……………デュオか」

「エナに作戦に支障が出そうになったら止めるように言われたんだ

」

エクシは目の前に倒れている巨体に一瞬目を移し、またデュオへと戻した。

「……………強いな」

「昔から喧嘩ばかりしていたからねー」

(……………喧嘩慣れというレベルではないと思うのだが)

だが今のデュオはそんなこと気にしていないようで、

「早く戻るよー」

と言った。

「……………体が動かない」

デュオは少しだけ考えた後、顔を上げた。

「分かった、私が運んであげよー」

「……………どうやって」

「こっやって」

「……………!？」

次の瞬間エクシの体はデュオによって丸太を担ぐように肩に担がれていた。

「じゃあ行くよー」

驚くエクシを無視してデュオは教室を出た。

## 思い出の夜

《九月 十四日 PM 6:20》

「おい」

それはペンデの声だった。

「こんなに呑気にしていいのかよ」

ペンデの視線の先には今日の勝利をたたえ合う生徒達の姿があった。

「なにが？」

「機動隊が来るんだろ。いつ来るか解らないんだし戦闘準備はいつでもしておくべきだろ」

「いつも気を張っていたらもたないよ」

「だけどなあ」

それでもペンデは未だに不安そうである。

「機動隊は面倒くさがって夜には来ないよ」

「……確かに。今の公務員は定時じゃないと働かないからなあ」

もつともな答えを聞くとペンデは安心したように人ごみの中へと戻って行った。

「あ、エナ。ペンデと何話してたのー？」

「なんでもないよ。それより体育館の隅に置いたクラッカーと缶詰を持ってきてよ。ご飯にしよう」

そして、体育館全体での食事が始まった。

クラッカー四枚と缶詰一つの決して多くない食事。

しかし、そこにいた生徒達全員は思った

「こんなに楽しい食事は久しぶりだ、と。」

《九月 十四日 PM10:00》

食事が終わり、することもないので時間は早い皆もすでに寝付いていた。

敷布団などというものはなく、あるのは一人一枚、エナ達が配った毛布だけだった。

昼の疲れのせいかまわりの生徒は割かしすぐに寝付いていたが、ペンデは毛布をかぶりながらも寝付けずにいた。

「そろそろ交代の時間だな」

思い出したようにつぶやくとペンデは布団から起き上がると舞台の裏にある階段を上り、体育館の屋上に向かう。

夜中は当番を決めて二人ペアで見張りをすることになっていた。交代は互い違いに行うため、もう一人はすでに来ている。

「後は頼んだぞ」

屋上にかかる途中で交代するはずだった生徒とすれ違い、双眼鏡を手渡される。

そして、屋上が上がってペンデが見たのは、優しげな微笑みをたたえたエナだった。

「やあ、ペンデ」

「ペアってエナだったのか」

「そうだよ」

ペンデはエクシの横に腰を下ろした。

しばらくの間二人とも無言だったがぼつり、とエナがつぶやいた。「やっぱり、機動隊と戦うのが怖い？」

「……ああ、怖い」

二人の間に再び沈黙の空気が横たわる。

「あの時は、中学に立て籠もった時は俺たちがあんなにあっけなく負けるもんだとは思ってなかった。必ず母校を残してやる、ってみんな得意気込んでた。なのに、あっけなく負けた」

「……………」

「なあエナ」

ペンデが体を抱え込むようにして小さくなる。

「俺達は本当に勝てるんだろうか」

その手は小さく震え、ペンデはそれを隠そうとするように体をより強く抱え込む。

「大丈夫」

その言葉で顔を上げたペンデの目にはエナがとても輝いて見えた。

「今度は私達も一緒にいるから」

まるでペンデが抱えていた闇を溶かすかのよう。

「君一人が全部背負わなくてもいいんだよ」

## 思い出の夜（後書き）

僕の小説はWordに書いたものをコピー&ペーストして投稿して、行と行の間はめったに開いていませんが、他の人の小説を読むところどころ行を開けています。

そう考えてみると、Wordで見えていた時は間がなくても見やすい（というより間がいくつもあると見づらい）のですが、ここで見てみると間がなくダーと書いてあると結構見づらいと感じたので試しに開けてみました。

こうすると見やすいかどうかの感想を聞かせてもらえると嬉しいのですが……………

開けるのはいいがもっと少なくていい、または多くていいといったことも聞かせてもらえるとありがたいです。

今まで投稿した全ての話を書き直すのはかなり骨が折れそうなのでませんが、特に見づらいという苦情が来ない限りはこれからの話はところどころに行と行の間を入れていこうと思います。

## 機動隊

《九月 十五日 AM6:10》

「ここは稲穂高校の正門前です。この高校では昨日から生徒達のグループが立て籠もっています。学校側は今朝、機動隊を呼び、これを鎮圧しようとしている模様です」

「あ、いたいたー」

その時正門にあるバリケードの向こうから顔を出したのはデュオだった。

「あなたは立て籠もっているグループのメンバーですか？」

それを見たテレビレポーターがかさずデュオに声をかける。

「そー、リーダーのデュオです」

「えー、ではデュオさん。いくつか質問してもよろしいでしょうか？」

「いいよー。私はそのために出てきたんだし」

デュオから承諾を得られるとマスコミのレポーターはこれ幸いとばかりに質問を始めた。

「デュオさん達はなぜ立て籠もろうとしたのでしょうか？」

「私達の部を学校に認めてもらうため」

レポーターの言葉にデュオはさらりと答える。

まるで質問内容が解っていたかのよう。

「体育館の中には人質となっている生徒達がいると聞いたのですが本当でしょうか？」

「まあ、本当かなー」

人質と言うよりは共犯者に近い気がするが、と、デュオは考えつつも答える。

「機動隊に対する今日の戦術はどうするのでしょうか」

「てったーい」

「へ？」

「だからー。撤退」

周りにいた人たちが皆啞然とする。

「逃げる……んですか？」

「逃げるんじゃないなくて撤退。同じ土俵の上で戦ったらいい装備を持っている機動隊のほうが有利になる。だから私達は私達が有利になる場所まで下がるんだー」

「じゃあ有利になるところまで撤退すれば戦えるのですね？」

「そう言ってたねー」

「じゃあ下がった後はどうするのでしょうか？」

言っていた、というデュオの言葉にレポーターは内心首をかしげていたが気にせず質問することにした。

「うーん、それを言っちゃうと作戦がばれちゃうからここでは言わない。まあ見てからのお楽しみ、ということにしておいて」

それを言くとデュオはバリケードの向こう側にその身を躍らせた。

「あ、デュオさん！」

「これ以上はちょっと話せないなあ。じゃあね」

デュオが兵の向こうに消え、啞然とした報道陣が取り残された。

《九月 十五日 AM10:20》

「こんな時間にやっと来るとはずいぶんと重役出勤だな、機動隊の連中は」

「機動隊のことはもう吹っ切れた？」

三棟屋上でペンデが双眼鏡を使い西門を見ているとそこにエナが登ってきた。

「おう、もう完全に……とはいかないが、まあ吹っ切れたぜ」  
「そつ」

ペンデの言葉に対しエナはそつけない言葉で返す。  
しばらくの間沈黙が続くが、その空気に耐えられなかったかペン  
デが口を開く。

「これから体育館まで撤退するんだよな」

「まあ、撤退するにはするんだけど、多少抵抗してからね」  
「どうしてだ？」

ペンデはエナの顔を不思議そうに見つめる。

「向こうにこつちがたいしたことはない、という風に思われな  
いよ。警戒してもらった方がいろいろとやりやすいからね」  
「なるほどな」

ペンデは再び双眼鏡を再び覗き始める。

「で、どうするんだ？」

「彼らには上を取られているということの恐ろしさを知ってもら  
おう」

## 機動隊 その2

《九月 十五日 AM10:40》

「退けー、退けえー」

生徒達は開戦そうそう苦戦を強いられていた。

何しろ火力が圧倒的に違う。

こちらが机やいすで造ったバリケードの後ろに隠れガスを撃つのに対し、機動隊はプラスチックでできた盾の後ろから暴徒鎮圧用のゴム弾を撃ってくるのだ。

「安藤がゴム弾に当たって気絶した!」

「田中、安藤を引きずって本陣まで戻れ」

生徒側の陣営には叫び声と悲鳴が入り混じったような声上がり、生徒達は徐々に後退していた。

そんな中、機動隊の陣内では機動隊の隊長と副隊長が会話していた。

「なんだか思っていたよりあっさり退きますね。手ごたえが無いっ  
たらありゃしない」

「おい、気を抜くなよ」

「私達を馬鹿にしやがった罰です。ざまー見る」

「どうも先ほどメガホンで会話していたのは彼女らしい。」

「だって奴ら、ろくな反撃もせずに逃げて行きますよ。これは勝つ  
たも同然でしょう」

隊長はこの副隊長をそれほど嫌いではないがこんな風にすぐに油  
断するのはあまり良く思っていない。

「……まあ若い女性だからなのかもしれないが」

「何か言いましたか?」

「なにも」

隊長は副隊長にばれないように小さくため息をついた。

そもそも、若い女性が副隊長だと機動隊も盛り上がるかも、という偉い人の考えで選ばれた彼女に何かを期待する方が間違いかもしれない。

「まあでも進行を止める理由も無いからな」

機動隊は隊長の命令で進み始めた。

そして機動隊の先頭が三棟の前についたときにその事件は起きた。

「煙幕用意！」

そんな掛け声と共に三棟二階の窓に生徒達がずらっと顔を出した。

「投下！」

そして機動隊の視界は白く染まる。

「前が見えない！」

「ゲホッ、チヨークの粉だ」

「ぎゃあ、目が、目があああ」

生徒達が落としてきたのはチヨークを粉々に砕いて造った煙幕だった。

だが生徒達の反撃はそれだけでは終わらない。

「第二波ああ」

今度生徒達が現れたのは三棟の屋上だった。

「投下！」

そして降ってきたのは掃除道具。

箒、箒、チリトリ、モップ、箒、雑巾、バケツ、たわし、スポンジ、チリトリ、箒、ゴミ箱。

次から次へと降ってくる。

中にはゴミ箱の中のゴミをぶちまける者もいた。

もうすでに機動隊はパニックを起こしていた。

反撃するはずがない、と思っていた者からの反撃が機動隊の面々の精神にもダメージを与えているのだ。

「たた、た、隊長大変なことになりました！」

「落ち着け、言葉を正しく喋れてないぞ」

いずれはこんなことが起こるだろうと思っていた隊長は副隊長はどここの事態を深刻には思っていなかった。

(むしろ自分たちがゆるみきっている、というのを実感できたのが本物の戦いでなくてよかったと思うべきだろう)

そう考えるとむしろ彼らに感謝すべきだろうか？ という考えが隊長の頭をよぎる。

「ででで、でも。どうしたら」

「とりあえず全員門まで下がらせよう。態勢を立て直して、今度は待ち伏せやトラップに気を付けて慎重に進もう」

### 機動隊 その3

《九月 十五日 AM 11:00》

「おっしやあ。投石トラップ成功」

石ではないが、とまわりにつっこまれながらもトラップの指揮を任されていたペンデははしゃいでいた。

そこにテセラが屋上まで上がってきた。

「エナさんからの伝令です。トラップ成功したら三棟前は放棄して渡り廊下から二棟へ移動。渡り廊下を封鎖したら 第二トラップの用意をするように、だそうです」

「よしわかった。撤収」

そう言うが早いが生徒達はもっていく荷物を持つとあっという間に走り去り、三棟屋上には誰もいなくなった。

《九月 十五日 AM 11:10》

「何？ 三棟前がもぬけの空だと」

「そうです、生徒達は三棟前を放棄し二棟前まで前線を後退。そのまま待機しています」

「妙だな……」

本来ならこちらが退いて、態勢を立て直している間に三棟前を取り戻せるはずなのに生徒達はそれどころか二棟前まで退却している。

「きつと恐れをなして逃げたんですよ。隊長、攻め込みましょう」

「お前はさつき痛い目を見たのにまだ懲りないのか」

「と言いますと？」

隊長はさつきとは違い、今度は盛大にため息をついた。

それを見た副隊長は少しむくれる。

「罨の可能性があるな。まずは三棟前に人数を並べて、三棟内を探索、そして二棟内に入って生徒達がいるようだったら捕獲しよう」

「と、向こうは思っているんだろうね」

「でも、あんな罨に引っ掛かるかなー？」

「大丈夫だよ。きっと機動隊はあのトラップを前に立ち往生する」

《九月 十五日 AM 11:20》

「三棟と二棟をつなぐ渡り廊下は防火扉が閉まっけていて開けることができませんでした。向こう側にバリケードでも積んであるものと思われます」

「そうか二棟へは入れなかったか……なら、三棟内に異常はなかったか」

「ありませんでした」

機動隊の陣営では隊員が三棟に入った時の様子を隊長に報告していた。

「むう、これでは生徒達が何やってるのか解らなくてうかつに攻め込めませんね」

「そうだな。二棟を三棟から見た時はどうなっていた」

「二棟には生徒達はいましたがどんな罨を仕掛けているかは確認できませんでした」

その報告を聞いた隊長は心の中で舌打ちを一つついた。

「……仕方がないしばらくこのまま待機して生徒達の動向を探ろう」

## 機動隊 その4

《九月 十五日 AM 11:40》

「攻めてきませんねえ」

「ああ、来ないな」

二棟二階の窓からテセラとペンデが顔をのぞかせていた。

「二十分もじつとしたままですね」

「こっちは何もせずただいだけなのにな」

二棟には罨らしい罨は張られていなかった。

ただ生徒達がそこにいる、ただそれだけだった。

「心理的な罨ってやつだな。本当は何もないのに一度罨に引っ掛かった奴はまた何か罨があるんじゃないかと思って恐れ、手を出すことができずに尻込みする」

「でも、本当に何か仕掛けておいた方がよかつたんじゃないですか？ 相手が手を出しづらいのは一緒なんですし」

「あのなあテセラ。もし本当に罨を仕掛けておいてもしそれが向こうに見つかるとうこうは、ああ、アレが向こうの仕掛けた罨なんだな。アレに気を付けて行こう、という気になるだろう。だから何も仕掛けずにおくのさ。何も仕掛けなければ何が仕掛けてあるかなんて絶対にばれないからな」

「なるほど、ペンデさんも考えたりするんですね」

「今のはすこし傷ついたぞ、俺」

テセラはバックから乾パンを取り出しかじり始める。

「ペンデさんも要ります？」

「貰おう」

周りでも他の生徒達も早めの昼食に入っていた。

《九月 十五日 PMO:10》

稲穂高校の近くにある定食屋、そこで機動隊の隊長と副隊長は食事を取っていた。

「思っていたより手こずりますね。当初の予定だともう生徒達を体育館まで追いつめて生徒達は籠城戦を強いられるはずだったのに」「それだけ生徒達のリーダーが優秀なんだろう。現に彼らの罠で我々は攻めあぐねている」

戦線が硬直しているため、機動隊は昼の時間に交代で昼食を取っているのだ。

「昼休みが終了したら攻めよう。このままの状態でもらちが明かない」

「そうですね。結局罠も見つかりませんでしたし」

「頭上にだけは警戒が必要だな」

そう言っつて隊長は食べていたAランチをかき込んだ。

《九月 十五日 PMO:30》

「状況に何か変化は？」

「特に何も」

「そうか……」

そう言っつと隊長はマイクを持ち口に近付けた。

『全員突撃！』

その命令で機動隊の面々は声一つ上げずに突撃していく。すると二棟前にいた生徒達はすぐに一棟の方へ逃げて行ってしま

った。

『隊長、生徒達が一党へ向けて逃げていきます』

「……………どうということだ？」

畏があるならそれで迎え撃ってくるはずだ。

『二棟に畏の類は一切ありません』

「……………やられたな。畏を置かずに時間稼ぎをするのが目的だったのか。……………一棟前に攻め入れ。塞がれてはいると思うが一応二棟に入つて、渡り廊下の方を確認。二人まわしとけ」

それだけ言つと隊長はマイクを机に置く。

(大丈夫だ。一棟からあとは渡り廊下で逃げることはできない。上からの畏は無いはずだ)

隊長はまるで自分に言い聞かせるように小さな声でつぶやいた。

だがそのつぶやきは何かあるのではないかという疑心暗鬼な状態を如実に表していた。

## 機動隊 その5

《九月 十五日 PMO:30》

機動隊が足音だけを響かせ一棟前の生徒達の造ったバリケードへと走って行く。

生徒達の陣営からガスガンが発射されるがその球は機動隊の盾に虚しくはじかれる。

機動隊の方も撃ち返す必要もなし、とばかりに盾を構えてただひたすらに前進する。

そして、先頭のグループがバリケードに突入しようとした瞬間

その先頭が消えた。

正確には落ちたのだ、生徒達の掘った巨大な落とし穴に。

一気に大量にきたのが悪かった。

最初は落とし穴には段ボールを張りその上に土を被せていたので、先頭にいた隊員達は落とし穴に気付くことなく落ちて行った。

それから後は前の人が邪魔で見えず釣られて落ちるといったことが続出し、二十八人いた一棟前に突っ込んだ隊員の内二十一人が落ちた。

そして生徒達の取った行動はそれが最後ではなかった。

「いまだ！ 押せえええ」

生徒達はバリケードの頂上部分を一齐に押したのだ、穴へと向けて。

「ひっ！」

穴の中にいたある隊員にはその映像はスローで起こったかのよう

に見えた。

大量の机が降ってくるその中、彼はとっさに盾を上に向けて目をつぶった。

そしてその次の瞬間に彼の腕を衝撃が支配した。

《九月 十五日 PMO:40》

「おかえりなさい」

「よう、ただいま」

機動隊が落とし穴に落ちている間にペンデ達は生徒達を引き連れて体育館に戻ってきた。

「あの落とし穴の作戦の時になってようやく、どうしてエナが正門にバリケードを張ったかが解ったぜ」

「え、ペンデさん、解ったんですか!？」

「ああ」

驚いた顔のテセラに対してペンデは大いに得意そうだった。

「西門から機動隊を招き入れるためさ。三棟、二棟、一棟と長い距離があつた方が防ぎやすいからな」

「でもあんな風に簡単に積み上げられただけのバリケードなんてすぐにごかせてしまっくんじゃ……」

「あのバリケードは主に侵入を防ぐよりも視覚的に封鎖されているということが欲しかったのさ」

「どうして?」

そう言っただけでテセラは小首をかしげる。

「今朝の状態でテセラなら正門を攻められたか?」

「いや、人がいっぱいいて邪魔な気がするけど……あ、そうか」

「そういうこと。あのバリケードで野次馬やマスコミをあの場所へ

集めることで機動隊があの場合を攻められなくしたのさ。そうだと  
エナ」

ペンデがエナの方を見るとエナがパラパラと拍手をペンデに送っ  
ていた。

「大正解だよ。すごい、すごい」

「だろ」

そう言っつて格好をつけるペンデをテセラが尊敬のまなざしで見  
ていた。

「今日初めて実感したんですけどペンデさんっているんなこと考え  
てすごいですよね」

「ありがとうテセラ。なんかもう、久しぶりに人に褒められて気が  
する」

ペンデが涙を流すのではないかというほど哀愁を誘う表情でテセ  
ラの手を握る。

その時、デュオが体育館の中からエナの近くまでやってきた。

そしてペンデとテセラの方を向くと一瞬固まったあと、エナの手  
を取り一気にペンデから距離をとった。

「……あんた達、そういう関係だったんだー」  
「は？」

ペンデはデュオの顔を見てその視線の先にある、がっちりとテセ  
ラの手を握った自分の手を見た。

「ちがーうー!」

少し薄暗くなってきた空にペンデの声が響いた。

## 不意打ちの夜

《九月 十五日 PM 1:15》

「生徒達に体育館に逃げ込まれてしまった。誠に申し訳ない」  
機動隊の隊長が隣に立っている教頭に話しかける。

落とし穴の罠で落ちた隊員を救助している内に生徒達には体育館に逃げ込まれ、体育館の門にもバリケードを張られてしまった。  
その上、隊員達からは負傷者も出た。

「過去のことは悔んでもしょうがないでしょう。それより早くあの体育館を攻め落としたらどうです？」

「それが門にはカギがかけれられ、入ることができませんし、かといって周りの壁をよじ登ろうとすると高圧電流が流れている有刺鉄線群があるし。体育館の屋上には見張りの生徒がいます。下手に突入すると集中砲火を浴びます。というかなんで体育館回りに有刺鉄線があるんですか」

「元々はありませんでしたよ。今回のために実行犯達に取り付けたんですよ」

教頭が苦い顔をする。

教頭が苦い顔をした理由が痛いほどわかり、隊長も苦笑いを浮かべる。

「とにかくここは暗くなるのを待ちます。6:00に体育館の電源を落とし体育館側の明かりを消し。有刺鉄線の高圧電流を無効化。暗視ゴーグルをつけた部下達が突入します。それで決着です」

《九月 十五日 PM 4:50》

「昨日は一応納得したがなあ」  
体育館の中にはぎやかだった。

簡単に言うと緩み切っていた。

「これはいくらなんでも緩みすぎだろ！ 外には機動隊がずらりと並んでいるんだぜ」

「大丈夫、エナが言うには屋上に見張りさえ立てていればむやみに攻めてくることはないしー。なにかが始まるのは夜、おそらく5：30から7：00までの時間帯に攻め込んでくるって言うっていた」

「その情報は正しいのかよ」

「エナが言ったんだから間違いない」

「はあ、とペンデがため息をつく。」

「それで、件のエナはどこ行っただんだ？」

「さっきトイレに行っただよー」

「あつそう。て、聞いたいてなんだけど何でエナの行動全てを知っているんだか……」

その疑問はそれ以上考えると怖い考えが思い浮かんでしまいそうである。

「まあデュオが変態なのはこの際置いといてえ」

ペンデが言葉途中にして空中でコマのように回転する。

「誰が変態だー！」

デュオが放ったキックが見事にペンデの顎をとらえていた。

「変態に変態と言って何が悪い」

「ホモに変態とは言われたくないこの変態！」

「ほ、ホモじゃねえよ。大体それを言ったらデュオはレズじゃねえか」

「レズじゃないよ！ 何の根拠があつてそんなこと言うてんのさー」

「根拠も何もエナとの関係を見ていたらいやでもわかるって！」

「？ 何の話ー」

「何って……デュオってエナのことを好きなんじゃ……」  
「だからそのどこがレスなわけ？」  
好きであるという点に対して否定をしていないことを突っ込むことすらペンデは忘れていた。

「へ？ いや、だって」

そんなかみ合わない会話を繰り返しているとエナがトイレから現れた。

男子トイレから。

「「「は？」「」」

ペンデのみならずその場にいたテセラ、エクシも疑問の声を上げる。

「ん、どうしたの、皆？」

そんな空気を感じエナが質問する。

「エナー、ペンデが私をいじめてくるー」

デュオが目には涙を浮かべエナに泣きつく。

「……本当に？」

「うお、なんかエナから美少女が出しちゃいけない殺気を感じる。

嘘、嘘だからな、いじめてなんかいない。デュオの単なる被害妄想だ」

「嘘だ、レスって言ったー！」

「え？」

今度はエナが疑問を口にした。

「どうしてデュオがレスってことになるの？」

（（あんだ、あんだ））

三人とも一斉に心の中で突っ込む。

「大体なんでエナは男子トイレから出てきたんだ」

「なんで、て、トイレに行ってきたからだよ」

「そうじゃなくて……」

ペンデが頭を抱える。

「俺が言いたいのは何で男子用のトイレにエナが入っていたのかって話だよ」

ああ、とエナはつぶやいて納得する。

「そんなの私が男子だからに決まってるよ」

「な」

「ん」

「……………だっ」

「「てー！」」

「三人とも最近会ったばかりなのにずいぶんと息ぴったりだね」

「な」を言ったのがペンデ、「ん」を言ったのはテセラ、……………

……………だっ」を言ったのがエクシ、最後の「てー！」を三人で喋ると  
いう荒技にエナは大層感心する。

「その外見で男かよ！」

「微妙に失礼だよ……………」

そうは言っても、ペンデ達に言わせればほおを膨らせて怒る姿は  
どっからどう見ても女子だった。

「だ、だってエナさん一人称が私じゃないですか」

「ああ、これは小さい頃、いとことデュオにこの一人称を強制され  
続けているうちにこの一人称で固定されちゃったんだよ」

ペンデ達三人は口をあんどぐりと開けていた。

「それが俺をホモって行った理由の一つか？」

「当然！」

「それですか！」

いきなりテセラが手を打ち納得する。

「なにが？」

デュオがテセラに聞き返す。

「このチームに呼ばれた僕達三人は何で全員男なのかなって思っていたんです。二人とも女だったら残りのメンバーも全員女のほうが色々と上手くいくと思うのに。」

最初は男手が足りないのかなって思っていたんですけど。あれはエナさんがデュオさんに浮気と疑われないようにとむぐっ

エナがあわててテセラの口をふさぐ。

「(テセラ、それは間違ってもデュオにだけは言わないでよ)」

「(何ですか)」

エナが小声でテセラに囁きそれにつられてテセラも小さい声で聞き返す。

「(実を言うと私は小さいころからずっとデュオに片思いしてるんだよ。でもそんなこと本人には恥ずかしくて言えないよ)」

「(片思いってというのはエナさんの勘違いだと思いますけど)」

「そんなことよりエナ、早く作業済ませちゃおう」

これ使っただけでしょ、と言ったデュオの手には大量のコード類と大型の照明があった。

「あ、そうそう皆も運ぶのを手伝ってよ。それ私一人だと重すぎてなんだよそれ」

「畏だよ」

「畏あ？」

皆の周りにはてなマークが浮かぶ。

「人間だれしも新しく手に入れたものは使いたくなるものだよ」

## 不意打ちの夜 その2

《九月 十五日 PM 5:55》

「全員、暗視ゴーグルはつけたな」

機動隊の隊長が隊員全員に注意を促している。

暗視ゴーグルは先週、機動隊に来た新しい装備である。

その装備を使えることで少し興奮気味な隊員もいる。

「6:00になったら外から体育館の電源を落とす。そうしたら一班が塀をよじ登り有刺鉄線を切って突入。それから五分ごとに二班、三班、四班と突入せよ」

今の言葉を中にいる生徒達に聞こえないように全員に伝える。

「6:00まであと十秒、九、八、七」

「いよいよだな」

無線から部下の声が聞こえ、突入へのカウントダウンが始まる。

「六、五、四」

辺りの空気に緊張の糸が張り詰め、部隊の全員の呼吸までもが聞こえてくるような気がする。

「三、二、一、ゼロ」

「突入だ！」

無線に向かって檄を飛ばす。

体育館の電気が消え、壁の内側からあわてたような大量の足音が聞こえる。

一班が塀を登り有刺鉄線を切る。

そして一班がそのまま塀を越えた時、バン！ という音がして、強い光が壁の内側からあふれてきた。

「馬鹿な！ 電源は落としたはずなのに」

壁の内側から雄叫びが上がり、たくさんの打撃音と機動隊一班の悲鳴が聞こえてきた。

暗視ゴーグルは暗い場所で辺りを見るための道具であり、そこに多量の光を当てると受光量オーバーで壊れて見えなくなってしまう。

おそらく、暗視ゴーグルが壊れ何も見えない状態の隊員を集団でタコ殴りにしたのだろう。そこから考えられることは

「はめられた！ 罠だ」

おそらく、中に予備の電源でも持ち込んでいたのだろう。

壁の上を見ると何人も人影が有刺鉄線を貼り直していった。

おそらく貼り直した後に高電圧をかけるのであろう。

(どうする完全に貼り直される前に無理にでも突入するか、いや、

ここは待つべきだろう。下手に突っ込むとこちらの被害が増えるかもしれない)

なににせよ相手にこちらの考えが読まれていたのだ。

このまま突っ込んだらどんな罠が待っているかわからない。

その時、一か所だけ有刺鉄線が張り直そうとされていない場所が

一か所あるのに気付いた。バリケードで固められた門の上。

そこにだけ有刺鉄線が張り直されていなかったのだ。

(なんだ、あれは。張り忘れか？ それとも罠か？)

機動隊の隊長が首をかしげているとそこから何かが放り出されてきた。

近づいて見てみるとそれは

それは気絶した機動隊一班の隊員だった。

「お、おい、大丈夫かよ」

違う班の隊員も気絶した仲間らに駆け寄ってきた。どうやら殴られて気絶しているだけで打撲以外に目立ったけがなく、それを確認すると隊長はほっと息をついた。だが同時に何か得体の知れないものが込みあがってきた。

### 違和感

そして気付いた。  
気絶している隊員達は本来、持っていたはずのゴム弾頭の銃弾が入ったマシンガンを持っていなかった。

「なんだなんだ」

騒ぎを聞きつけて周りの隊員達が集まってくる。

今の機動隊の隊員達の錬度は全体的に低く。

隊員達はふらふらと命令した場所から動いてしまうことはしばしばあった。

だが今まで起こった事件はその程度の錬度でも十分に対処可能だった。

そう、それが今までに起こった事件と同じなら

だが、この戦いは、

(危険だ！ なんだかわからんがこれは危険だ！)

普通は気にならない。

気絶した人間がマシンガンを握りしめたままだとは思わないし、敵がその装備を返してくれるとも思わない、思わないが。

この戦いが始まってからというもの生徒達に逃げ切れ、この体育館に立て籠もられ罨にもはめられた。

そして隊長の勘が危険信号を鳴らしていた。

「皆、危険だ！ 散らばれ！」

だがその声はすでに遅すぎた。  
次の瞬間、機動隊の頭上へと大量のゴム弾が降り注ぎ体育館の門の前は地獄と化した。

《九月 十五日 PM 6 : 15》

「おー、機動隊の連中がたくさん倒れたぜ。良い気味な気分もしいでもないが、少し罪悪感がしないでもないな」

「たぶん、死んではいけないと思うけど……朗報なのはあそこにいる隊長格らしき人がおそらく戦線復帰できなさそうってことだね」

屋上にいたペンデを中心とした狙撃グループは空になったマシンガンを地面に向かって放り投げ、建物の中に戻って行った。

「それよりよく暗視ゴーグルを装備した部隊が攻めてくるってわかったな」

「簡単だよ。あの暗視ゴーグルは一週間前にここの機動隊に配備されたものなんだ。そしてまだ機動隊はあれを実戦投入していないんだよ」

「なるほど。それで連中暗視ゴーグルを使いたがっているだろうってことになるんだな」

「そういうことだね」

あとを追うようにしてペンデとエナも建物の中に入る。

「さてこれで相手の戦力を大幅に削ることに成功したよ。今夜はおそらくもう攻撃を仕掛けては来ないと思うし、一応交代で見張りを立たせて明日のためにゆっくり休んだ方がいいね」

「明日もなんかするの？」

「うん、私達は明日、蒸発しようと思う」

## 終戦の時

《九月 十六日 AM 4 : 30》

「ほんとに攻めてこねえ。エナの奴すげーな」

外にいる機動隊は夜が明けてもなんの動きも見せていなかった。

その時ペンデはエナが男だと分かった後、デュオはエナが女のよ  
うな容姿であることについて言っていた事を思い出した。

「エナが男であるのに対し、女の外見をもっているのはきつと神様  
がエナに男の心理も女の心理も全て理解できるようにするために違  
いないよー」  
と。

思い出していると、別の生徒が屋上まで上がってきた。

「交代に来たぞ」

「はいよ」

ペンデはその生徒に双眼鏡を渡して建物の中に戻る。

そのまま寝ようかどうか考えたが、ここから寝ると六時に起きる  
のが辛そうなので起きていることにした。

《九月 十六日 AM 6 : 10》

「ハイ、みなさんよく眠れましたか」

エナが体育館全体に覚醒を促している。

「今日は全員でここを撤退しようと思います」  
体育館中から驚きの声上がる。

「どうして撤退なんだ」

「納得できん」

辺りから不満の声が上がる。

『みなさん聞いてください』

エナが体育館全体に落ち着くよう促すが体育館の喧騒は一向に収まる気配がない。

エナが握ったマイクをデュオが奪う。

『喋るな！』

デュオが吠え体育館が静まり返った。

「さ、エナ続きをどうぞ」

「ん、ありがとうデュオ」

エナはデュオからマイクを受け取ると言葉を続ける。

『昨日の夜、私達は機動隊を追い返しました。しかしこのまま立て籠もると困ることがあります。例えば食糧です。今は私達が持ち込んだ食糧があります』

エナが体育館の一角を指し示す。

そこには缶詰などが積み重ねられていた。

『今はあのよう食糧があります。しかしあの食糧もこの人数がいればすぐになくなってしまいます。それに今回追い払ったことで向こうはこれを排除するためもっと大げさなものを使ってくるかもしれません。例えばブルドーザーで門ごと破壊するかもしれません』

体育館がまた騒がしくなるがデュオの人にはらみでおとなしくなる。

『安田講堂事件を知っているでしょうか？ あの事件は機動隊が出てきて鎮圧されてしまいました。力で築き上げたものは必ず力で崩されるのです』

エナが似合わない握りこぶしを振り上げる。

『必要なのは力を逃がすことなんです。だからこそその逃走、負ける

ための逃走ではなく勝つための逃走をしましょう。そして  
『そしてエナは生徒達に向かって魅惑的にウイंकする。』

『同じ逃げるならミステリアスに逃げましょう』

「エナは絶対自分の容姿を理解してやっているよな」  
その様子をペンデは半ばあきれながら見ていた。

《九月 十六日 AM 6:30》

塀の外には機動隊の生き残り（別に死んではないが）が集まっていた。

『立て籠もっている生徒達に告ぎます。早く人質を解放しておとなしく投降しなさい。さもなければ、隊長の仇等々を含めて強制的に全員捕まえます』

その様子を、屋上からエナ、デュオ、テセラ、ペンデ、エクシの五人がいた。

他の生徒達はいない。

この場にはいないという意味ではなくこの学校にいない。

「こりゃあちらさんだいぶキてるな」

「あれだけコケにして隊長をけがさせれば普通そうなるんじゃないですか」

「……………まだ中に連れ込まれた奴らが人質だと思っているのは滑稽だな」

「さて最後のお仕事、彼らをここに突入させれば終わりだよ」  
エナがデュオにメガホンを渡す。

「……………このためにデュオにだけ叫ばせていたのだな」

「そう、常にデュオ一人で喋らせることで一人しか喋っていないことに疑問を抱かせないんだよ」

「これで最後、みんなやるよ」

皆が覚悟を決めたようにうなずく。

そして最後の意味を込めデュオが大きく息を吸う。

『断る！！』

この反応は機動隊でも想像していたらしくあまり驚いていなかった。

『投降しないのなら力づくでも』

『御託はいいからさっさとかかってきな。昨日から全部が失敗してるじゃないか』

「あとはデュオに任せて私達は脱出するよ」

デュオ以外の四人は体育館の中に入って行った。

『……そんなことを言って後悔しても知らないからね』

『戦争終結の条件はもう言ったでしょ。こちらの譲歩をそちらが断つた以上、残っているのはどちらかが全滅することだけだよ』

『けが人が出てからじゃ遅いからね』

その時ポケットの中からバイブ音がする。

エナ達が逃げ切れた合図だ。

『体面上の礼儀はもういいよ。こちらがけがで訴えることはないし。遠慮なく来な』

『撃て！』

とたんロケット弾が飛んできた。

## 終戦の時（後書き）

さて、僕のエガイタ物語もそろそろ終りに近づいてまいりました。  
あと少しの期間、皆様お付き合いください。

## 終戦の時

《九月 十六日 AM 6:50》

機動隊が体育館の中に突入すると、壁の内側には誰もいなかった。  
(体育館の中に立て籠もっているのでしょうか?)

隊長がけがをして代わりに指揮をすることになった副隊長は怪訝  
そうな顔になった。

壁の内側には多くの生徒が待機していると思っていたのだ。

そんなことを考えていると体育館の中に突入していった部下の一人が戻ってきた。

「どうしたんですか、ずいぶん早いんですけど。もしかして踏み込んだところで奴らが投降でもしてきたんですか?」

ロケット弾にビビってそうしたというのなら撃ったかいがあったというものだ、と彼女は思った。

「違います。生徒達が誰一人として見つからないのです!」

「なんですって!?!」

「ですから、中に人が一人もいないのです!」

「そんな馬鹿な!」

中には犯人達と人質に取られている生徒達が大量にいるはずだ。

「そんな馬鹿なことがあるはずないでしょう! 百人を超える人間が急にいなくなるわけないじゃないですか! どこかに隠れてるに決まっています!」

「体育館内はくまなく探しました。もし見逃している場所があると  
しても百人も隠すスペースはないはずです」

「だけど外にもいないし。どこかにいるはずですよ」

「どこかに逃げたというのは考えられないのですか?」

「突入前は屋上にいたリーダー格らしき人間と会話までしていたんですよ。その時にはいました。ここは周りをぐるっと私達に囲まれていたし、その他の場所は体育館を囲むものより高い学校を囲む塀です。出られるわけがない。どうなってるんですか！」

体育館には生徒達がいた痕跡は残ってなかった。

体育館に残っていたのは周りを囲っている電気の流れていない有刺鉄線と夜に機動隊が落とした装備だけ。

「消えちゃったとか」

「馬鹿なこと言うんじゃないやありません！」

隊員の一人が言った言葉を大声で否定しつつ副隊長の心の中ではもしかしたらという感情がぬぐえないでいた。

《九月 十六日 AM 7:05》

体育館の中の様子は教師陣にも伝わってきた。

どうも中にいたはずの生徒達が機動隊にまわりを囲まれた状況で消えてしまったようだ、とのことだった。

その報告を聞いた高村先生はにやりと口元を歪めた。

「なるほど、このために俺を顧問にしたわけか」

高村先生はこの卒業生だ。

生徒達しか知らないことをいろいろと知っている。

情報を漏らさないように、裏切らないようにと釘を刺す意味での顧問だったのだ。

「なるほど、これがわからないのは教師が悪いな」

エナの予想通り、高村先生にはやはりトリックが分かっていた。

### 終戦の時 その3

《九月 十六日 AM6:40》

時はデュオの脱出時に戻る。

エナがデュオに連絡を入れる。そのとたんに爆発音がした。

(体育館の入り口の方からだ！)

そのとたんデュオが屋上の上でこちら側に走ってきた。

デュオは手すりに二つに折りたたんだ長いロープの折り目の部分を手すりに掛け、そのロープにつかまり下りてきた。

下りきると持っていたロープの両端の内、片方を離しロープを巻きとって回収するところらに走って来る。

「なんでまだいるのー？」

「逃げ出すときは一緒だよ」

エナ達がいるのは体育館の裏にあるマンホールにいた。

「ロケット弾撃ってきたー。狂った連中ー」

「どこに？」

「入口に一つ、建物に一つ」

マンホールから降りると残りの三人がいた。

「これで終わったな、リーダー」

「そうですね」

「……………これで俺達の勝ちだ」

これが、学生戦争が終結した瞬間だった。

《九月 十六日 AM 6:50》

五人はマンホールを通り、ボイラー室に着くとゴミ捨て場にある壁の穴から外に出た。

そして全員が帰路に着く。

皆が学校から離れている中、エナは皆の後ろを少し遅れて歩いていた。

妖艶な笑みを浮かべて。

「そう、これで僕達の勝ちだ」

そのつぶやきはやっと来た秋の風にかき消され、誰の耳に残ることもなかった。

## 次への希望

《九月 十六日 PM 7:30》

夜、校長室には二人の人間がいた。

「待っていてありがとうございます」

「……貴様！」

「校長先生がそんな汚い言葉を使っではいけませんよ」

片方は校長、そしてもう片方はエナだった。

校長はデュオと話していた時の温厚さはなく、怒りをあらわにしていた。

「貴様らのグループのせいであれだけうちの高校が被害をこうむったか！」

そのセリフを聞きながらもエナは妖艶な笑みを崩さない。

「それは災難なことですね。でも今日はそのこととは関係のないお話をしに来たんです」

「どういうことだ？」

校長の顔に疑問符が浮かぶ。

「無様に逃げ出したらしいが実行犯の名前を公表すれば貴様らは全員捕まるのだぞ」

「浅井さん、五十嵐さん、岡安さん、黒木さん、佐々木さん」

エナが名前を羅列すると、さっきまで怒りをあらわにしていた校長の顔を、言葉とは裏腹に汗が伝う。

「校長先生、ずいぶんと顔が広いですね。ああそれと僕が持っているこのテープ、今回の事件とはまったく関係ないんですけどね。今日、事件が終わってホッとしてあちこちに電話をかけたあなたの声

と

校長の額の汗の量が増す。

「どこかの高校の校長とある議員の会話が入っているらしいんですよ」

さつきまで赤かった校長の顔は心なしか青く見える。

「どうも来週にある選挙のために議員の票集めを校長であることの人脈を利用して手伝う代わりに多額のお金を受け取るっていう話をしているらしいんですけど」

エナは一度ここで言葉を切る。

「……………何が目的なんだ？」

校長の顔は青を通り越して白。

脂汗にまみれ泣きべそをかいたような顔をしている校長は哀れを通り越してどこか滑稽だった。

エナは校長のそんな様子をさげすんだ目で見る。

「選挙が来週で焦るのもわかりますが盗聴器があるのかどうかくらいは確認したほうがいいですよ」

エナが学校を一回、全て占拠させたのは、校長室に盗聴器を仕掛けるためでもあったのだ。

「な、なんでもする。だから公表だけは」

土下座でもしかねない勢いで校長がエナに懇願した。

「大丈夫ですよ。僕が頼むことはあなたに対してそこまで損な話ではないと思います。それをしていただければこのテープは差し上げます」

「……………ちゃんとマスターテープでコピーはないんだろっな」  
テープを渡すと聞いて校長が少し余裕を取り戻す。

「安心してください。ちゃんとマスターテープですよ。コピーもありません。ただし、もしも約束を守らなかったら議員の方を脅して  
告白させます。そうしたらあなたも道連れです」

「解った。ならば願いを聞こう。その願いとはなんだ」

弱みを握られているにしてはでかい態度だな。

この校長自分の立場が解っているのだろうかとエナは思いつつ。

エナは校長の態度の変化に少々興ざめしていた。

しかしそれは顔には出さなかった。

「その願いはですね

## 次への希望 その2

《九月 十七日 PM7:00》

「隊長！ 今日こそやつらの正体を暴いてやりましょう。ほら、捜査、捜査」

「捜査は中止だ」

「そうそう、捜査は中 ええ！ 何ですか！」  
副隊長の顔が驚愕に見開かれる。

「被害届が引き下げられた。『この事件のおとしまえは犯人を捕まえることではなく、教育に力を入れることで取り戻そう』と思っています。そのためにも捜査で生徒達の日常をくるわせたくないのです』だそうだ」

隊長は校長の言葉を苦々しげに一言一句繰り返す。

「くそっ！」

隊長の怒声はしばらく部屋の中で響き続けた。

《九月 十七日 PM7:45》

「よ、お二人さん」

いつものようにエナとデュオが二人で歩いていると後ろから呼び止めるものがいた。

「やあ、皆。おはよう」

「久しぶりー」

「久しぶりって……昨日会ったばっかだろうが」  
後ろを振り向くとペンデ達三人がいた。

「ふふ、まあいいんじゃない。一日でも久しぶりは久しぶりだよ」

「まあいいけどよ。終わっちまってちょっと残念だったけど楽しかったぜ。またこんなことがあるときには呼んでくれよ」  
それを聞いたエナが微笑する。

「何言ってるの。まだ終わってないよ」

「「「え?」「」」

「今、放送で流れているでしょ。聴いてみなよ」  
放送で校長と放送委員長が話していた。

『では、今回の事件の犯人達が作ろうとしている部の設立を認めると』

『ええ認めます』

「「「は?」「」」

三人の声がはもる。

「これで私たちはずっと仲間だよ」

『これ以上問題を起こさないことを条件に彼らの部活を認めたいと思います』

三人はしばらく無言だった。

しばらくするとペンデが吹き出した。

「ははっ、これでまたお前らと馬鹿やれる訳か」

「そう言えば」

テセラが思い出したように口を開く。

「この部の名前って何なんですか?」

「あれー? 言ってなかったっけー?」

デュオが首をかしげる。

『わが校はこの部の設立を認めます』  
同時に、放送で校長も話し始める。

「我々はこの時代に生まれた騒音である」という意味も込めて」  
『この部、その名も』  
「この部の名は」  
『騒音部』

## 次への希望 その2（後書き）

この話はこれをもって完結となります。

この物語は僕の手を離れ、独立したのだと考えています。  
です。

僕はこの小説に関する制作活動に一切の制限をかけません。

もしあったとしたらですが、誰かがこの小説の続きを書こうとか、リメイクしようとかしても僕を気にする必要はありませんので好きなようにやってください。

それに、この小説の設定をそのまま使って書いた作品やこの話の続きの作品を皆さんがエガイタとしてもその小説を二次創作として扱う必要はありません。

例えば、にじファンではなく小説を読もうに投稿してくれて結構です。

僕は自分の書いた文章が拙いものであることを理解しています。  
ですから、僕から生まれたこの物語が誰かの手によりきれいに生まれ変わってくれるのならそれはとても喜ぶべきものであると考えています。

拙い僕のエガイタこの小説を最後まで読んでくれた皆様にはその権利があると思いますので。

今までご愛読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8196w/>

---

学校戦争騒音部

2011年10月30日19時02分発行